

新刊 「爽美の季節」 目 次

- 哲学 (1) 梅原猛の「人類哲学」
(2) 思想は進化しない——「哲学の三つの伝統」について
(3) 西洋哲学と日本思想の対話 ——テトラレンマとディレンマ
(4) ハンナ・アーレント——凡庸なる悪
(5) ポスト68年の思想と政治
(6) 蔡國強×浅田彰——ヒロシマ黒い花火
(7) 村上靖彦「摘便とお花見」——現象学的無意識
(8) 九相図—不浄観
- 文芸 (1) 無援の抒情
(2) 夢跡一紙 ——子故の闇に
(3) 棺一基——大道寺将司
(4) 二人静（ふたりしずか）
- 音楽 (1) NON C'É あなたはいない ラウラ・パウジーニ
(2) 家入レオ——太陽の女神、あるいは家入一真——ひきこもり
(3) ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第5番」
- 絵画 (1) 薄白色の余韻——小林且典 展覧会
(2) 雨宿り——続「京都日本画新展」に寄せて
(3) 死の島—ラフマニノフ、そしてベックリーン
- 映像 (1) 映画「ミュンヘン」MUNICH
(2) るろうに剣心
(3) ドラマ評（1）チームバチスタ「螺鈿迷宮」—cure と care
(4) ドラマ評（2）「明日、ママがいない」— 絆
(5) ドラマ評（3）Dr. DMAT—瓦礫の下のヒポクラテス 命の優先順位
(6) ドラマ評（4）「僕のいた時間」—ALS
- スポーツ (1) スポーツ観戦——ある日のフィギュアスケート
(2) アルガルベカップ2014
(3) Sochi 五輪—金メダルの喧騒：パリの散歩道
(4) Sochi 五輪余話—浅田真央、最後の舞
(5) 遠 藤
- 音楽 (1) 希望のシンフォニー ——佐村河内守「交響曲 HIROSHIMA」について
(2) 希望のシンフォニーからアイロニーのシンフォニーへ
(3) おぼかたさん（1）
(4) おぼかたさん（2）
(5) おぼかたさん（3）

(1) 梅原猛 人類哲学序説

先日（５月２２日）日本文化国際センターで梅原猛の米寿記念講演会が行われた。
山田知事からの祝電、講演途中には京都市長までが駆けつけた。

講演の中身は自分のやってきた学問的業績、日文研の創設にまつわることなどを話していた。

今年になって岩波新書から「人類哲学序説」という本が出た。これは２０１１年い東京で行った京芸大の秋季講座全５回を１冊五章にまとめたものである。その第五章は「森の思想」というタイトルでこの本の結びの部分に当たる。

概要を記せばヨーロッパの国々は森を伐採し、そこを牧畜の耕地として食糧確保をした狩猟民族が作った国であったが、そういう国で崇拝された神々には「太陽」が主神としてではなく、それに較べて森を水の供給地として確保し太陽と水によって稲作農耕社会を作った日本などでは太陽が主神となっている、という趣旨のものである。神道では「アマテラス」と「トヨウケ」がそれぞれ太陽と水の神であり、仏教では「大日如来」と「観音」が太陽と水の仏であった。農耕民族は水を蓄える森を大切に守り太陽と水によってその生活を支えたのである。古代エジプトでは太陽神ラーが尊崇されたし、中国では黄河文明の前に長江文明という農耕民族の国（良渚に都を置いた）の文明があり、前４２００年頃黄帝の国によって滅ばされたが、その移動の過程で縄文期の日本に弥生期の稲作農耕をもたらしたのではないかという説も紹介されている。（第四章「ヘブライズムとヘレニズムの呪縛を超えて」）

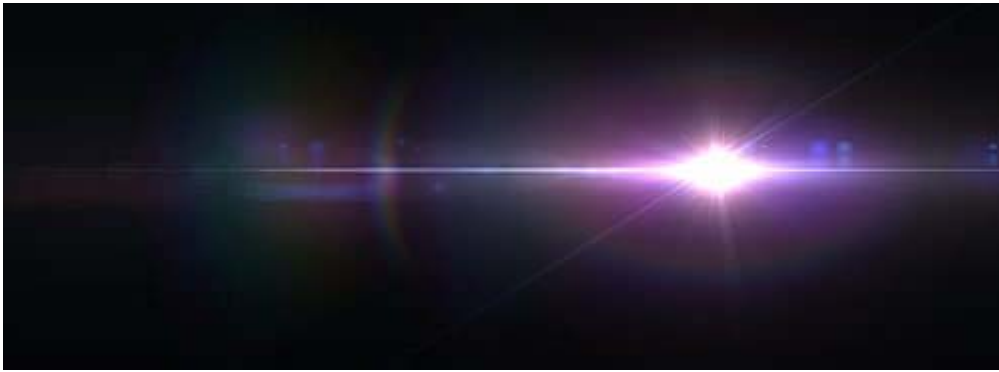
さて、梅原は狩猟採取、漁労採取文明である森を大切にした縄文文化こそが「草木国土悉皆成仏」の思想的バックボーンだったと言っている。「草木国土悉皆成仏」は勿論１０世紀前後に成立した日本独自の仏教思想（天台本覚思想）だが、「草木」も「国土」も成仏するという森羅万象への目配りをしたこの一句に梅原は日本的なものすべてがあると考えたらしい。

そういう訳で日本には森が沢山残っている。草木でさえ成仏できるのであるから、いわんや・・・

2013. 9. 12

(2) 思想は進化しない

——「哲学の三つの伝統」について



世界の歴史の中で哲学を位置づけるというのはなかなか難しいことである。野田又夫は紀元前6世紀頃の中国諸子百家や、インドのジャイナ教、仏教、ギリシアの自然哲学からソクラテス・プラトン・アリストテレスに至る時代の哲学の三つを世界の哲学の主要な潮流として位置づけ論を展開している。

まず中国古代の哲学は、神話を合理化してもっぱら道徳哲学、社会哲学に専心した。インドの哲学は神話から徐々に形而（1）上学に進んだ。ギリシアの哲学は、神話から客観的な自然学に向かう傾向を著しく示した。

（ 野田又夫「哲学の三つの伝統」 ）

中国古代の哲学・・・神話を合理化してもっぱら道徳哲学、社会哲学に

インドの哲学・・・神話から徐々に形而上学に

ギリシアの哲学・・・神話から客観的な自然学に向かう傾向

このように思想の発展傾向をおおざっぱに捕らえ、またその叙述の仕方をギリシアの思想の発展を基盤にして次のような三通りに分類した。

修辞法（レトリック）・・・プロタゴラスなど

弁証法（ディアレクティック）・・・ソクラテス、プラトン

論証法（アポディクテック）・・・アリストテレス

さてソクラテスからアリストテレスに至る仕事を以上のように見ることによって、一般に思想の論理の三つの層が区別できるであろう。すなわち、第一は、修辞法的な段階であり、第二は弁証法的な段階であり、第三は論証法的な段階である。そこでわれわれは、修辞法、弁証法、論証法のこの三つの区別をたずさえて、改めて中国とインドの古代哲学の論理性を見なおしてみよう。

すると一般的に中国の古代哲学は、大部分は、修辞法的段階においてあり、インドの古代哲学は、少なくともその末期において、ある種の弁証法にまで到達したと判定できるであろう。

（ 同 ）

こういう見方で、世界の各哲学領域の到達点をおおざっぱにくくると

中国哲学	<u>修辞法（レトリック）的段階</u> ・・・莊子、孔子、禪宗
インド哲学	<u>弁証法（ディアレクティック）的段階</u> ・・・龍樹（空論）
ギリシア哲学	<u>論証法（アポディクテック）的段階</u> ・・・アリストテレス (推理論を公理体系化)

というようなことになる。引き続いて合理主義者野田は、哲学に対する科学の重要性を鑑みてこの時代の哲学の課題を次のように書いている。「哲学の三つの伝統」というのは1969年に書かれたものだからかなり時代錯誤的な部分がある)

かくて科学を生み出した信仰と知識との間の緊張は、われわれもある仕方でもちつづけなければならない。そこで概していうと、現代の哲学者は二つの意味で相反する方向の問題を課せられているといえるであろう。すなわち一つには、いわゆる哲学よりも科学において、理論的客観的な世界認識が達成されていることを承認して、哲学者は、科学の論理的分析を任務とすべきである、と考えられている。ただしこの場合も、十九世紀以来科学自身がさまざまなレベルに分岐しているという理由によって、哲学者の仕事は、実はたんなる論理的分析の仕事ではなくて、客観的世界についてのみならず人生の全体についての博大な眼光を必要とするものとなっているのであるが、ともかく科学という第一次的な世界認識に対する、第二次的な反省を、哲学は引き受けているのである。

ところで、哲学のもう一つの問題は、いうまでもなく、神話や宗教がいわば独断的に与えてきた人生の意味に対する答を、改めて批判的に取り上げることである。しかしながらこの方向の反省は、多くの場合、科学の論理的分析という第一の問題から切りはなされ、哲学者自身が、みずからの思索の論理的客観性の要求をゆるめがちであって、その結果、哲学は、さまざまな人生観の相対性についての歴史的な考察として、一種の博識の誇示になったり、あるいはまた、どれかの世界観を独断的に選ぶことによって、疑似宗教的な姿を呈するに至ったりすることが多いのである。

(同)

最近の哲学を目指すものは西田が目指した日本オリジナルな哲学を構築するということなど目指すべきではないという警告の元型のような文章だ。

まず野田は現代哲学の2つの課題と主張をとりあげる。

- (1) いわゆる哲学よりも科学において、理論的客観的な世界認識が達成されていることを承認すること。それゆえ科学という第一次的な世界認識に対する、第二次的な反省を、哲学は引き受けるべきである。(日本オリジナルな哲学などはもってのほか)
- (2) 神話や宗教がいわば独断的に与えてきた人生の意味に対する答を、改めて批判的に取り上げることについては、どれかの世界観を独断的に選ぶことによって、疑似宗教的な姿を呈するに至ったりすることを慎むべきだ。

こういった姿勢は西田哲学に対してもとられている。

そんな点から、私どもの先生で、禅の真理を、何とか論理的に表現したいと絶えずいつておられた西田幾多郎先生のことを思い出さざるをえません。西田先生は、よく、東洋の思想には、西洋の思想にない、ある独特な真実がある、特に禅仏教にはそういうものがある、といわれ、しかし、それをわれわれは、論理的に表現しなければいけない、論理的に表現しようと努力しなければならない、といわれました。それを、私の先ほどお話ししたことに結びつけて申しますと、禅の真実というものは、中国でレトリカルな表現をとったが、西田先生の要求は、それをもう一度ディアレクティカルな形に直し、ある意味でそれをインドの形にもどし、さらにギリシアの論理学の反省をそこに加えて、われわれのものとしなければならない、ということになるわけであります。歴史にかかずに申しますと、西田先生のいわれるところは、歴史をもう一ぺん逆にするということになる。そして、なぜそういうことが必要であるかということは、問題になりうる。いま坐禅をして悟った人がいるとしますと、悟った真理を普通の禅宗の坊さんのように、ある偈の形で表現して人に伝えるだけで、それでよいのではないか、西田先生のように、それを論理的に表現することは、必要なかどうか、ということが、問題になると思います。しかし私は、今までの話をもとにして、やはり西田先生のお考えに賛成したい。その場合、論理的に表現するというのは、何か詩の形でいわれているものを、ただ論理の言葉でいい直すことなのではないので、その真理をもととして今われわれが直面しているたくさんの問題を解こうとすることです。そして、もしその原理で解くことができれば、禅の悟りは、そのことによって、ある普遍性論理性をもつことになるわけであります。つまり、僧堂中でのある発見ということから、広い普遍的なはたらきをもった原理になる。西田先生が、禅の真理とというものを西洋風な論理で改めて表現しなければならないといわれるのは、そういうことだと思います

(野田又夫「西洋哲学と東洋哲学」)

ここでは野田は「禅的真理」を論理化し、普遍化しなければならないという西田自身の考え方に賛同しているが——そしてそれは、科学への準拠を低く見積もり破砕した戦前の独断哲学への批判という観点を持つてはいるのだが——それは全くひいきの引き倒しで、禅の真理が論理化され公理化されるということはあるにないのだし、人類はその思考法において、修辞法（レトリック）的段階→弁証法（ディアレクティック）的段階→論証法（アポディクテック）的段階と素直に「進化」している訳ではないのだ。三つの段階は各々を補強しあいながら進展すべきだし、むしろこれらの諸段階が混在していることによって次の時代が切り開かれたのであった。荘子のレトリカルな表現があつてこそ中国に哲学や仏教が理解されたのだし、レトリカルな神話・物語の存在が次の時代を予言したのだ。

しかも預言者は常に詩人であった・・・

(4) ハンナ・アーレント——凡庸な悪

久々に映画館なるものに行った。ウィークデイの午前中であるにもかかわらず9割方の座席が埋まっていた。アクションがあるわけでもない、2時間近い映画だったが、一気に見ることができた。

新聞などでもこの地味な映画が、隠れたヒット作になっていることが報じられ、特に最後の弁明の8分間のスピーチがとりあげられたりしている。

悪を凡庸なものから発生するものとして捉える観点は別に新しいものでもなんでもない。

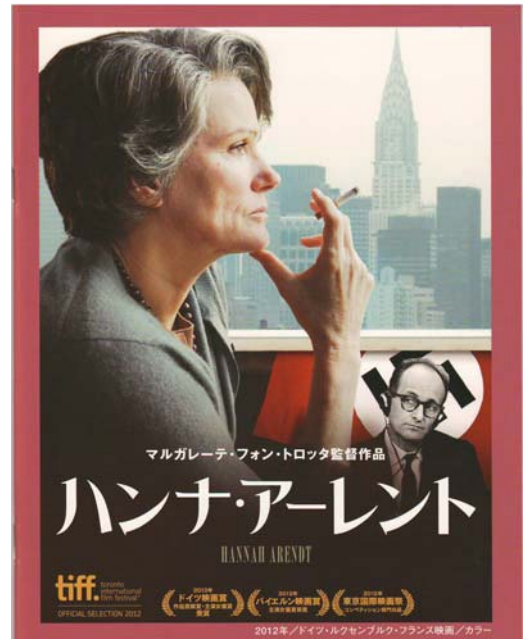
しかし1960年にアルゼンチンでとらえられ、イスラエルで裁判にかけられたアイヒマンに関して、それを悪魔の所業と描かないことは、政治学者にとっては致命的なことだった。

とくにアーレントが取り上げたユダヤ人の指導者にあたるユダヤ人評議会のメンバーがナチスと虐殺されたユダヤ人との間での救済にあまり役に立たなかったというアーレントの指摘が火に油を注いで、ユダヤ人社会を真っ向から敵にまわすことになった。

ハンナ・アーレントといえば、まず知られているのは哲学者ハイデggerの恋人だったということだろう。1927年、あの「存在と時間」を出版して一躍、時の人となったハイデggerに師事し、その前後に恋人となったアーレント。ナチスに追われてアメリカに亡命したアーレントはナチスと手を結んだハイデggerを憎んでいたと同時に愛してもいた。そのつながりには“Es gibt Dinge, die stärker sind, als der Mensch”(人間以上の強いなにか)がある、と語ったと言う。ドイツでの1950年の再会、75年の彼女の死に至るまで二人の関係は続いていた。



それはさておき、ドイツ系ユダヤ人だった彼女は1933年にゲシュタポに拘束され、その後パリに亡命、1937年にマルクス主義者ハインリッヒ・ブリュッヒャーと出会い、40年に再婚。同年フランスのギュルス収容所に連行されるが、脱出。41年に母と夫を連れてアメリカに亡命。1951年にアメリカ国籍を取得し、「全体主義の起原」を出版してセンセーショ



ナルなデビューを飾る。1959年プリンストン大学教授。1963年アイヒマン裁判を傍聴するためにイスラエルに渡航、裁判のレポートをザ・ニュー Yorker 誌に掲載し、孤立無援の激しい論争を繰り広げた。

映画は1960年、アルゼンチンでイスラエル諜報機関（モサド）のメンバーによるアイヒマンの逮捕の場面から始まって、裁判の傍聴の場面へとつながっていく。

裁判にかけられているアイヒマンの応答はアーレントにとっては不可解なものだった。600万人のユダヤ人を収容所に送ったアイヒマンは「凶悪な悪鬼」とは程遠く、ある意味でどこにも存在する上からの命令を遵守する官僚の一人に見えたのだ。このことを彼女は思考停止状態の機械人間の引き起こす「凡庸な悪」という名で呼んだ。普通の人間が残



虐な悪を犯す殺人鬼に成長していくメカニズムを彼女は冷静に訴えたかったのだ。この怜悯さは常識と理性を兼ね備えた人びとを激昂させ、とりわけ同じ民族であるユダヤ人から裏切り者、許しがたい敵と糾弾される事態を招いたのだった。

隣にいる誰もが時と場所によっては怪物に成長する、という事態は現代人が決して肯定したくはない物語であろう。しかしそれを過ぎ去った時代の物語と済ましているからこそ、このアーレントの平凡な結論は不気味であり、考える価値を有しているものなのだ。

監督 M, V. トロッタ

アーレント役 バルバラ・スコヴァ (2012)

2013. 12. 12



(5) ポスト68年の思想と政治

2月1日(土)京大人文研主催の公開シンポジウムがあった。私は別用があつて、途中から参加した。もう4:30だった。1:00から始まっているから3:30もたつて主要な基礎提起部分は終わっているのだろう。

シンポジストは以下の通り。

()は生年・所属。

長崎 浩「68年は『若者たちの叛乱』か」(1936 評論家)

結 秀美「村上一郎と市民社会派マルクス主義」(1949 文芸評論家)

廣瀬 純「マルクス主義政治哲学のために」～アントニオ・ネグリとその同時代人
(1971 龍谷大学)

ギャビン・ウォーカー「ポスト68年の状況：構造から政治へ」

(1979 カナダ・マギル大学)

司会 市田良彦(1957 神戸大)

長原 豊(1952 法政大学)

参加者は大講義室が老若男女でいっぱいだったから、およそ200～300人は集まっていたであろう。

私が着席したときはディスカッションの最中だった。バデゥ Badiou 派のとネグリ Negri 派との対論だ。ネグリ Negri 派が客観情勢分析を要請するとしたらバデゥ Badiou 派は「出来事」の偶発的生起、不可能性の破壊を狙う。

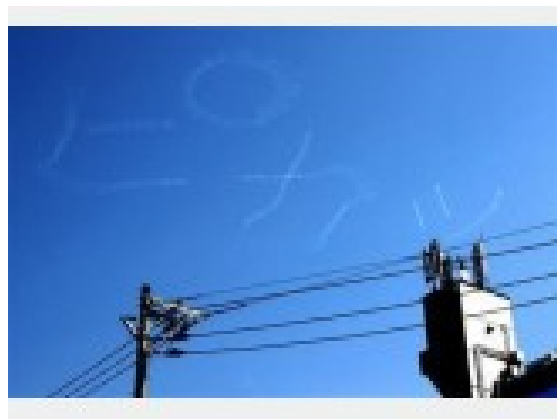
話がつれたときにいきなりどこかからかよく聞いたことのある声が聞こえた。なんと浅田彰が最前列にいた。(もう、たけしの「ニュースキャスター」から干されてしまったのか・・・)彼は「シニア派は客観情勢分析 CAUSE の必要性を言い、ジュニア派は機会 OCCASION 出来事に乗って行く政治的ロマン主義だ」と整理。ここで休憩が入り、再開してフロアーから「自分は69年に京大時計塔のまえで1000人もの大集会の前で羽仁五郎が演説をぶったあの熱狂を思い出す。今のようなバデゥがどうのネグリがどうのという議論を繰り返すのなら、帰る。今日のこの集会には失望しか感じない。」と述べた。前半参加できなかった私にも今日の集会の低調さが伝わってくる。「私は太平洋戦争宣戦布告を知ってるんだ、69年に参加したと偉そうな口をきくな」という老人の頓珍漢な茶々が入る。議論はマル経がどうの近経がどうのとますますつまらない方に傾斜して行きそのお墨付き

浅田は適当な良識的市民として解説を加えながら時々すねてみせるというスタンスでつまらぬ対談を延々と続け、「構造と力」以降30年間の思想的空白をさらけ出していた。一方の蔡國強はほぼ同年代の文革世代（1957～）。その世代の反骨の荒々しさを世界にぶつけているパフォーマーだ。先年（2008年）北京オリンピックのときの開会式で29個の宇宙フットを花火で打ち上げるというパフォーマンスを行って話題となった。（海外からは、国策に迎合したとの批判を受ける。）彼とヒロシマの結びつきは早く1994年の広島中央公園での核反応をテーマにした火薬を使った野外プロジェクトから始まっている。

1996年アメリカネバダ州核実験場跡で「キノコ雲のある世紀」。

1999年ベネチアビエンナーレでは収奪される小作農の像を陳列する社会主義プロパガンダ彫刻の再製作で金獅子賞を受賞、など世界的名声を勝ち得て2008年広島賞を受賞した際、10月25日にその展覧会として原爆ドーム上空に黒い花火を打ち上げるというパフォーマンスを行った。

話しは少しややこしくなるが、この打ち上げの5日前10月20日に卯城竜太ひいきいるChim↑Pomがドーム上空で飛行機による「ピカッ」という文字を飛行機雲で描くというパフォーマンスを行った。これに対して被爆者団体から広島市現代美術館の担当者に抗議がよせられ、館長は謝罪した。Chim↑Pomの方は自分達なりに考えとし、その後「被爆者の方々にたいへん不快な思いをさせた」と謝罪し、東京の「無人島プロダクション」での展覧会を中止したが、広島での11月1日からの展覧会は挙行するとした。



この事件があってから5日後の蔡國強の黒い花火打ち上げは予定通り挙行され、市民の注目を集めた。後日、国際的に評価された芸術家には許されて、無名の芸術団体は謝罪しなければならぬのかという批判も出た。しかし前述したように蔡國強とヒロシマとの結びつきは深く、単純な反発は起こらなかった。

2

この件で考えてみなければならないのは、芸術表現（メッセージ伝達）の性格の問題だ。



芸術表現のためには人を殺してもよいという論法は通らないし、性的表現は抑制される。
(勿論国情によってその描写、撮影限度はまちまちだが・・・)

基本的な問題なのだが、表現にはその表現手段、素材、機能によってさまざまな形態が考えられる。たとえば絵画表現と椅子の作成といった工芸作品を較べてみるとこのことは一目瞭然となる。居間などに使われる椅子の場合、普通まず「座る」という用途、機能が優先されて次に快適なすわり心地、気分をや和らげる装飾性などを工夫することが考えられる。そもそも座れない椅子は他の目的を考えなければ、論外となる。これに対して絵画の場合それは視覚を誘発するものであれば、それが肖像画であろうと、風景作品であろうと（描写内容は様々であったとしても）平面に何かが描かれさえすればよい。誰かがそれに腰掛けるわけでも、鼻紙にするわけでもない。つまり絵画の場合は「見られる」という機能がありさえすればよい。それに対して椅子の作成の場合に基本は「座れる」ということである。それがあって更に装飾性や安楽性のための工夫がやって来る。

車の場合はまず「走る」ということである。これがなければ、いかに美しい車でもそれは展示物に過ぎない。かといってかっこうのよくない車には誰も乗りたがらないであろう。つまりファッション性が次には必要とされる。衣服は外敵からの防御、保温性というような安全性がまずあって、更にそれに装飾性が加わる。(逆の場合もあるけれど・・・)

こうして「モノ」は一般にその機能性とメッセージ性（装飾性、言語伝達）とに分かれ、メッセージ性の強い表現と機能性の強い表現があることが分かる。この機能性を極端に強調していくとたとえば鍋釜を叩いて隣人に嫌がらせをすとか、机のバリケードを築いて敵をシャットアウトすとか、新聞紙を野原の敷物にするとかいった用途外の利用法（転用）も可能になる。

Chim↑Pomの「ピカッ」は市民の頭上に過去の前爆を思い起こさせるような悪戯のような印象を与えた結果抗議を招いたのだろう。蔡とてそれは同じであるが実物と類似の現象を使って忘れられた歴史のトラウマに迫ろうとしたことにその意味があったように思える。彼は10月29日花火を打ち上げる前に行ったの新聞記者（西村）のインタビューに次のように答えている。

太陽が輝く平和な空でいきなり爆発が起こり、犠牲者が出る。しばらくすると、何事もなかったように人々は日常生活に戻る。それが私の21世紀の戦争のイメージだ。これまでも（爆破テロのあった）スペインとニューヨークで黒煙を打ち上げた。

なぜ黒煙なのか。晴れた空に漂う黒煙は詩的で悲しみを感じさせる。作品の深いところには、鎮魂と希望のメッセージがある。火薬は破壊に使われるが、美しいアートにもなる。1人のアーティストが（破壊に使われるものを）美に変えることができるのであれば人類全体でもっと大きなことができる。それは、人類にとっての希望である。

今回、ヒロシマ賞に決まって感動した。私のアートが広島で評価されるのは難しいと思ったから。火薬を使った爆発が平和を意味する－ということは逆説的だからだ。

このほどニューヨークのグッゲンハイム美術館で、車8台が爆発して飛んでいくイメージの作品を展示した。作品の善し悪しではなく、大きな関心を集め、記録的な来場者があった。

テロは悪いことだが、それを題材にして美しい作品が生まれる矛盾を前に、観客は恐怖を感じたり考えたりするだろう。アートの魅力は、そんな、表現の「臨界点」にある。

被爆者に対する悲しみは万国共通なので、自由に表現できる余地は少ない。だがアーティストとして、人類の悲劇と無関係ではいられない。被爆者の理解を得ながらどこまでアートの限界を追求するのか。難しさを分かりながらチャレンジしている。

1994年に広島市中区の中央公園で、原爆による核反応をテーマに、火薬を使った野外プロジェクトを行った。その前に広島を何度も訪れ、原爆について学んだ。その後、ネバダの核実験場など全米各地で、小さな白煙の「きのこ雲」を上げるプロジェクトを行った。それらは私の代表作になった。ヒロシマは私にとって、創作の一つの出発点となっている。

人間にとって危険な爆発や暴力を使って人間の「臨界点」に迫ること、それがアートだと言い切っている。それは「モノ」の機能性を極限まで引っ張り出し、悪夢や恐怖を再現・体験させることによるトラウマ療法なのであろうか？芸術は取締りの対象にはならないが、妨害や国家破壊活動ともなれば由々しきこととして弾圧の手は伸びるであろう。蔡の危険なパフォーマンスが許されているのはそれがまだ臨界点でとどまっていて、そのメッセージ性が融合・爆発を起こさない手前で人々を異空間に誘い込むからであろう。

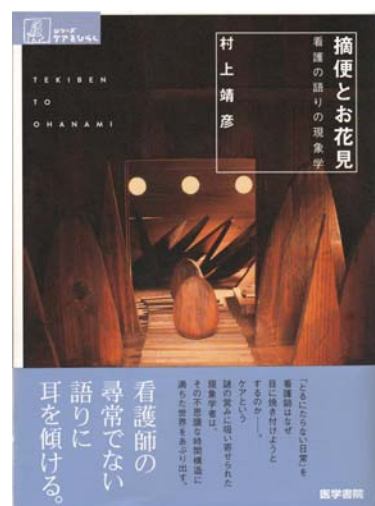
2013. 10. 21

(7) 村上靖彦「摘便とお花見」——現象学的無意識

1 <ケアの彼方>

「摘便」という言葉は普段日常に使われる言葉ではない。「便摘」とすれば「便を摘出する」のか、と理解しやすいかもしれない。看護・ケアの用語にはその世界独自の言葉があってあえて隠語とは呼ばないが、とこどき首をかしげるものがある。この言葉も漢語の特質からして目的語が後置されるため少々わかりづらいのだ。「急救」といえばわかり易いのだが、「救急」が本字だ。

本の「摘便とお花見」というタイトルは筆者がけっこう気



に入ってつけたのではあるまいか。リズムとしてこの併置はこころよいし、何よりも〈ケアの彼方〉と呼ばれる出来事をエピソードとして簡潔に表現しているからだ。

看護師Fさんは訪問看護で、進行性の麻痺を伴う病の30代の男性yさんを担当する。その介護の主要なものは「摘便」（便の摘出）で、その計画を立てることに熱中している最中にそのyさんが延命治療を必要としないという、いわゆる尊厳死に署名しようとする場面に遭遇する。そのときyさんが衰弱して署名を書きあぐねているのを、看護師Fさんは書きやすいようにサポートしてあげる。筆者村上はこの行為に次のようなコメントを付け加える。

ここでFさんが行っていることは、患者の生存と生活のために「必要なケア」ではない。職務として要請されているケアでもない。しかし直接のケアを超えたところで何か大事なことがあり、yさんが行為を組み立てるためのサポートをFさんはしようとする。医療として必要なケアを超えた〈ケアの彼方〉が暗示されている。

（ 第二章 3-3 ）

直接のケアを超えたところで何か大事なことが〈ケアの彼方〉の暗示と呼ばれている。この署名の後、突然yさんの死が訪れる・・・

2 「モチーフ」「シグナル」「ノイズ」

この本は4人の看護師へのインタビューを現象学的に分析したものである。その意図は「看護とは何か」とか看護・ケアの倫理性を浮かび上がらせようとしたものではなく（結果的にそういう範疇の看護者の考え方が浮き彫りになったりしているが）むしろインタビュー・対話という間主観的な関係における経験の流れを構造的に浮かび上がらせる試みというように受け取れる。そのために筆者がインタビュー分析の手がかりとして導入したコンセプトがたとえば「モチーフ」「シグナル」「ノイズ」といった考え方だ。

読んでもらえばわかるが、村上が総則的に説明している部分があるのでそれをあげておこう。

モチーフを通して語りの特異点が個体化する。これは行為の個体化と重なる（行為は共同で実現することもあり、必ずしも個人の人格とは一致しない）。そしてシグナルを通して、語り手が意識はしていない経験の背景に横たわる大きな流れ・運動が描かれる。最後に、ノイズを通して複数の文脈の交差点が描かれ、語り手の世界に対する態度のとり方の、大きな枠組みがその特異性において描かれる。シグナルとノイズが示す構造は、前章で〈ローカルな制度〉と呼んだものである。

（ 同 付章 1-2 ）

モチーフはその看護師に特有に反復される行為、思考の暗示。シグナルは「それ自体は

はっきりした意味を持たない単語、たとえば「やっぱり」「でもまあ」「どんどん」「なんか」といったような単語など、諸現象の運動が持つ大枠の構造を示すことば。ノイズはインタビューデータには、一見すると話題とは関係のない「主語と述語の不一致、言い間違い、言い淀み、沈黙、同じ言葉遣いの反復、ときどき使われる方言、一見唐突な話題の跳躍、独特な主語の選択、一読しても脈絡のわからない話題の展開、語りのトーンの変化など」で「語り手の世界に対する態度のとり方の、大きな枠組みがその特異性において描かれる。」

こういった鍵概念が対話の構造を浮かび上がらせてくる。この本の帯に「看護師の尋常でない語りに耳を傾ける」とか「誰も看護師を知らない」といったミステリアスなポップフレーズが書いてあるが、普段つきあっている人だって「誰もその人を知らない」といってもいいのだし、その「尋常でない語り」に耳を傾けられたらどんなにか語りは豊かな流れをつくっていただけるだろうかと思う。ナラティブの世界はまことにミステリアスだ。

村上は本のおしまいの方で重要なことをまとめている。

事例をたくさん集めなければ信頼性に欠けるのではないかと考える人もいるであろう。しかし、そもそも人間のあらゆる経験や行為は唯一的なものなのであるから、それを平均化すること自体できないことであろう。そこで発想を逆転したい。たった一人の経験、たった一回の出来事にも意味が宿り、たとえその出来事が繰り返されることのない特異なものであっても、あるいはそれだからこそ、複数のデータを混ぜて平均値をとってしまっただけでは失われてしまう意味が隠れている。その意味が他の人に理解可能である限り、ある種の普遍性を持つ。意味の水準において現象学は普遍性を獲得する。

(同 付章 1-2)

経験というものは誰の経験であっても一回きりであり、その特異性を持っている。だから複数のデータを混ぜて平均値をとってしまっただけではその大切なものが失われてしまうのだ。そういった「語り」や「傾聴」を私たちは、ふだん忘れている。もちろん村上の言う「モチーフ」「シグナル」「ノイズ」という考え方をマニュアルどおりに分析に応用してもファストフードのマニュアル接待くらいにしかならないだろう。やり方のキモを伝授されたからといって「ヤレル」とは限らない。サッカーボールをヘディングするにはそのボールのあるところに行って頭をぶつけばいいのだが、なかなか予測してそこに行くことは難しい。要するに修練と心意気。

最後に村上が**インタビュー分析**に必要な現象学的態度について述べている部分をあげておこう。

インタビュー分析における超越論的な主観性とは、看護師の語り与分析者の視線が浸透し合った状態のデータのことである（この浸透ゆえに、分析は奇妙な仕方では対人関係的なわち間主観的である）。分析されつつある語りは、具体的に体験されたものでありながら、同時に分析者の視点によってフィルターがかけられたものである。その意味で、分析され

た経験は、語り手個人のものでも分析者のものでもない。語り手の「眼」に映ったものと、分析者の「眼」、に映ったものとが合体したものなのだ。質的研究に応用された現象学の場合、超越論的な還元（場）は語り手にも分析者にも属さない匿名のものになる。

（ 同 付章 4－3 ）

ナラティブという間主観的経験の分析は「語り手個人のものでも分析者のものでもない。語り手の「眼」に映ったものと、分析者の「眼」、に映ったものとが合体したものなのだ。」従ってインタビュー分析における超越論的な主観性という（場）は語り手にも分析者にも属さない匿名のものになる。

これを**ビデオの分析**に言い換えて

語りの内容がカメラによる迫体験のなかで非人称化する経過は、カメラ自身の非人称性と対応している。現象学者の視線は、現象学者の個人的な体験ではない。カメラのように冷たい人称を持たない作用なのである。その意味で、成功した現象学においては、現象学者の個性のようなものは消えていくのではないかと思われる。誰のものでもない作品になっていくのだ。ノイズは看護師の背後の非人称的水準を示し、ビデオカメラは現象学者を非人称化する。しかし二つの非人称性が語りの個別性を壊すことはない。

（ 同 付章 4－4 ）

掲載されている4つの「語り」のうちで1つ目の「Fさんの語り」と4つ目の「Gさんの語り」が印象に残った。3つ目の「Cさんの語り」の死に直面する場面、思い出がプルーストに関連して展開される場面は、どうかと思った。「思い出」は迷宮と同じだ。無限遡及は救いではない。

2014. 1. 31

（8）九相図・・・不浄観

1

3月15日に京都深草の西岸寺（さいがんじ）で、九相図（くそうず）の絵解きが行われた。五幅対の掛け幅で、複数の相が描かれている。

ここ西岸寺は関白藤原忠道が建てた法性寺の小御堂で息子の九条兼実はこの地を愛



しよく訪れた。その娘、**玉日姫**が親鸞の最初の妻であるという一説がある。比叡山から降りて六角堂で煩惱を捨てきれず修行していた親鸞のもとに救世観音が現れ夢告を行う。「たとえお前が自分の欲望を抑えきれず、女と交わりたいと思ったとしても、自分が女の姿となって肉体の交わりを受けよう。そしてお前の一生を立派に飾り、極楽に往生させよう」このお告げによって親鸞は妻帯を許容する決意をしたと言われている。九条兼実が法然からふさわしい弟子を推挙してもらい、親鸞と玉日姫とを結婚させた。親鸞が配流されたとき玉日姫はこの地に残りその死後、随臣の有阿弥が西岸寺を開いた。

もっとも、この説は本願寺大谷派の説明とは異なっている。真宗東本願寺大谷派を開いた覚如の「親鸞聖人伝絵」によれば親鸞の妻は恵信尼一人である。ところが覚如の息子存覚の「親鸞聖人正明伝」では九条兼実の娘、玉日姫とのいきさつが書かれており、この「正明伝」は東国の門人を集めて始まった真宗高田派に伝わった。しかし正統の東本願寺派からは偽書として無視され続けた。この件については存覚の「親鸞聖人正明伝」を正しいと考えるようになったと、その理由を説明している梅原猛の「親鸞の謎」（「芸術新潮」3月号）に詳しい。

さて、九相図は不浄観を行うための図であるが、不浄観とは淫欲を止めるために身の不浄を観ずる観法のことを指している。不浄観には自身の法（五種不浄）と他身の法（九想観）とがある。

自身の法

五種不浄

- (1) 生处不浄・・・胎内の不浄
- (2) 種子不浄・・・父母の淫欲の結果としての肉体の不浄
- (3) 自性不浄・・・身体は衣服でいくら隠しても不浄
- (4) 自相不浄・・・身体は九孔より不浄物を垂れ流しており不浄
- (5) 究竟不浄・・・死後身体は爛壊し、白骨となり最も不浄

他身の法が九想観で次の9つの相（段階）に分けられている。

九想観

- (1) 新死相（しんしそう）・・・なくなったばかりの姿
- (2) 肪脹相（ぼうちょうそう）・・・死後硬直、黒い肌、膨張する体
- (3) 血塗相（けちずそう）・・・皮膚の裂け目から血が流れ出し異臭がする
- (4) 濃爛相（のうらんそう）・・・肉が膿み崩れ蛆虫がたかる
- (5) 噉食相（たんじきそう）・・・カラスや犬などに食べられたり引き裂かれたりする
- (6) 青瘀相（しょうおそう）・・・残った皮膚が黒く変色、ミイラ化する
- (7) 骨連相（こつれんそう）・・・骨はつながっているが、血や膿が付着
- (8) 骨散相（こつさんそう）・・・白骨がばらばらになる

(9) 古墳相 (こふんそう)・・・墓、塚、墓標などに埋葬される



(3 血 塗 相)

(5 噉食相)

この九相図はまことにリアルな図で、ここに掲載するに忍びないが・・・

ところで、このような不浄観によって本当に人間の性欲は抑制されるものなのか。日本の仏教にはインドの後期密教、チベット密教のような傾向は殆ど取り入れられなかった。合一による歓喜境こそ、梵我一如の解脱の境地とする密教は、わずかに理趣経を教義とする立川流によって伝えられたが、異端として撲滅された。それゆえ日本の仏教は基本的に原初のインド仏教に忠実な禁欲的な仏教である。そして九相図を使った不浄観はまさしくその実践的観法であった。

「往生要集」の厭離穢土の項、有名な六道の第五「人道」においては3つの相があるとされ、それは「一、不浄の相、二、苦の相、三、無常の相」。「身は臭く不浄なりと知れ、ども愚者は故(ことさら)に愛惜す」「いまだこの相を見ざるときは、愛染甚だ強けれども、もしこれを見已れば欲心都(すべ)て罷(や)み、」云々(不浄)。また身体的な内苦、社会的な外苦もいたるところにあって耐え難く(苦)、「当に知るべし、もろもろの余の苦患は、或いは免るる者あらんも、無常の一事は終に避くる処なきを」(無常)と述べられている。

しかしいったいこの不浄観というものはどれほどの効力のあるものか。

鴨長明の「発心集」にはこの手の話がいくつか収められているが、その代表例として第四の六「玄賓、念を重相の室に係くる事、不浄観の事」がある。

この玄賓僧都というのは面白い人で、この「発心集」の冒頭第一の一に「玄敏僧都、遁世逐電の事」に紹介されている。彼は興福寺で法相を学び大僧都にまで任ぜられた「やむごとなき智者なりけれど、世を厭ふ心深くして、更に寺の交はりを好まず」三輪川のほとりに隠棲した。また、帝の出仕を断り、いずこともなく消えてしまった。その後弟子が越の国で渡し守をしている玄敏を発見するが、逃げられてしまう。

こういう玄賓(普通はこの表記)がまだ若い頃彼を尊敬信頼するある大納言とつきあいがあった。あるとき玄賓は何かひどく思い思い、苦しげだったので大納言が尋ねてみると

何と玄賓は大納言の奥方に懸想したというのである。大納言はそんなことはたやすいことだと請け負い、自分の妻に事情を説明すると、いい加減な依頼ではあるまいと彼女は逢瀬を引き受けてくれるのである。かくして玄賓は寢所に正装をしてやってきたが奥方の前で二時間ばかり時を過ごし、自分への警告のつまはじきを繰り返しながら、何事もなく帰って行った。大納言はこのことでいっそう玄賓に傾倒するようになったという。

以上が玄賓のあらましが、長明はこの後に奥方の前で玄賓が不浄観を念じたであろう事と、その不浄観について解説を加えている。

「海に求め、山に得たる味わひも一夜へぬれば悉く不浄となりぬ」「況やたましひ去り、寿尽きぬる後は、空しく塚のほとりに捨つべし」賢者は「真の相を知る故に、念々にこれを厭ふ。」云々。

また現代の作家が書いたものとしては谷崎潤一郎の「**少将滋幹（しげもと）の母**」の後半には不浄観のことがかなり詳しく出てくる。

大納言国経と在原業平の孫である北の方との間にできた子が滋幹である。この小説は「母恋い」の物語として有名であるが、背景には複雑ないきさつが流れている。北の方は20過ぎ位で夫の大納言国経は80前後になろうとしている、全く50以上も年の差のある夫婦なのだ。それゆえ平中のような好色漢も一時はこの北の方の情人であったことさえある。しかし彼女は年老いた国経を聞ではいとしくいたわるやさしい妻であった。ところが、時の左大臣時平、彼は菅原道真を陰謀で左遷させ、しかも国経の甥であったが、年賀に事寄せて美人の誉れ高いこの伯母に当たる北の方を強奪してまんまと自分の物としてしまう。哀れな国経は地団太を踏んで悔しがるが、政治的に足元にも及ばない男に対して、なすすべもなく、その短い老い先に妻への思いを断ち切ることにすべてを費やした。

こういういきさつからして生き別れた滋幹にとっては北の方は実の母であり、しかもいつまでも経っても憧れの人である事に変わりはない。しかし父の日ごろの沈痛さは尋常ではなく、ある夜、外にふらりと出かけて行く父の後を滋幹はつけていき墓場の腐乱した若い女の死骸の前で礼拝する姿を目撃する。父は不浄観を実践し奪われた妻から何とか逃れようとはかない奮闘を続けているのであった。それで父は救われたのだろうか？ 作者は次のように書き付けている。

そして滋幹は子供心に、相手が幼童であることをも忘れて取り乱しているような父が、とても観念を成就することなどは出来ないであろう、恐らくいくら修行をしても徒労に終るのではあるまいか、と云うような危惧を抱いたのであった。彼は、恋しい人の面影を追うて日夜懊悩している父が、苦しさの余り救いを仏の道に求めた経路には同情が出来たし、そう云う父を傷ましいとも気の毒とも思わないではいられなかったが、でも、ありていに云うと、父が折角美しい母の印象をそのまま大切に保存しようと努めないで、それをことさら忌まわしい路上の屍骸に擬したりして、腐りただれた醜悪なものと思い込もうとするのには、何か、憤りに似た反抗心の湧き上るのを禁じ得なかったのであった。実際、彼は

もう少しで、

「お父さま、お願いします、私の大好きなお母さまを汚さないで下さい」

と、話の途中で幾度か叫びたくなったのを、辛うじて抑えたのであった。

そう云うことがあってから十箇月ばかりを経、明くる年の夏の終りに父はこの世を去ったのであるが、最期の折には果して色慾の世界から解脱しきれていたであろうか。嘗てあんなにも恋い焦れていたその人を、一顧の価値もない腐肉の塊であると観じて、清く、貴く、豁然と死んで行ったであろうか。それとも少年の滋幹が予想したように、結局仏にも救われないで、再びいとしい人の幻に苛まれながら、八十翁の胸の中になお情熱の火を燃やしつつ息を引き取ったのであろうか。——滋幹は、父の内部の闘争がどう云う結末を告げたかについて確証は挙げ得ないのであるが、しかし父の死に方が決して人の羨むような安らかな往生ではなかったことから推量して、多分あの時の自分の予想が誤まっていたように思うのであった。

（ 谷崎潤一郎の「少将滋幹の母」 十 ）

滋幹の気持ちでは、折角美しい母の印象を「忌まわしい路上の屍骸に擬したりして、腐りただれた醜悪なものと思い込もうとするのには、何か、憤りに似た反抗心」を父に対してわきたたせるものであったし、また父の修行の成果はその決して安らかではない死に様によっても押し図られた。

小説では大納言国経の死後、少将滋幹の西坂本の庵での懐かしい母との再会が麗しく語られることになる。

この谷崎の小説の中で作者の考察として引かれているのが天台の僧で後に西山に隠棲した慶政の「閑居友」という著述である。この書は健保4年（1216年）ころから鴨長明の「発心集」に触発されて書き始められたらしい。この書には4つの不浄観の話が収められているが「上の21」「唐橋河原の女の屍のこと」では慶政の実際に見た惨殺死体の話が載っている。

この話では19くらいの女が自分の女主人の夫と懇ろになり、それを知った女主人によってバラバラにされ、唐橋（九条鴨川のあたり）の下に無惨にも捨てられたいきさつが書いてある。筆者は「いまだむげに幼なく侍りしほどの事」と断り、この惨事を「世の人の心のさがなさ」「稲麻竹葦」のごとく浅はかにも見物にやってきましたと書いている。慶政も「故郷の近く」であったので見に行ってみると、手足もなく大きな木のきれ端のようなものが汚らわしくも横たわっていた。以下に不浄観を説き、「さても、この河原の屍の主、いとむざう也。一すじに悲しく恨めしき心にてこそ侍りけめ」とコメントしている。それは大人になってからの筆者の感慨であって、さぞかし幼い慶政にとってはどう受け取っていいかわからなかっただろうし、大きなトラウマとなって残ったに違いない。

こういう体験を引きずりながら「上の19」に記したのは比叡の中間僧の話である。長年夕暮れになると消え翌朝帰ってくるこの僧のことを、主は西坂本あたりで女と遊んで帰ってくるのであろうと憎く思い、あとを付けさせてみると、なんと行き先は蓮台野（今の

船岡) あたりで腐乱した死体の前で涙を流している中間僧をそこに見出したのである。つまり

中間僧は女遊びどころか不浄観の修行をしていたのだ。

この話が「少将滋幹の母」の中では不浄観の一例として引かれている。しかしいずれも女色から遠ざかるには説得力に乏しく谷崎の結論は前に述べたようには滋幹は母の美しさを冒瀆しないで欲しいという思いから、母の賛美に終始するのである。

いったいに不浄観には逆の発想はないのだろうか？すなわち不浄なるものがなぜこれほどまでに快美で、人間の心を惑わす幻覚であらざるを得ないのか、と。この幻覚によって滅びるものもあればまた、露のような儚い世を一時なりとも幸せに思っ死ぬ者もいるのだ。

2014. 3. 26

(1) 無援の抒情

新聞記事を拾っていて、道浦母都子が第8歌集「はやぶさ」を出したことを知った。

1980年に世に問うた歌集「無援の抒情」で知られている。



釈放されて帰りしわれの頬を打つ父よ
あなたこそ起たねばならぬ (「無援の抒情」)
車椅子押せば軽くて病む父は
てんとう虫のように眠りいき (「はやぶさ」)

4年前に亡くなった病棟の父のてんとう虫のように小さくなった姿だ。
母はすでに見送り、2009年に父も見送った。学生運動の闇の中で結婚した相手とも別れ、係累もない彼女は

子育てを知らぬ一生に乳色の
雲まぶしくて屋上を去る
「延命処置不要緊急連絡先なし」と
記したあとの時間の薄さ

などと詠う。両親を看取った自分を看取ってくれるものはいない。酷薄な人生だが、途絶えていた歌は甦り、生きることの新たな層が見え始めている。「無援の抒情」は決して「無縁の抒情」ではないだろう。

ひとつの局面は時が経てばまた別の側面が見えてくる。人生が包括的なものだとしても生きている私たちはただ「今」の断片に生きるしかない宿命を帯びる以上、物語の「無」を愛しく抱きとめる以外にない。

朝霧は山の裾より流れ着き
ハヤブサの森を白く浸すも (「はやぶさ」)

2014. 3. 19

(2) 夢跡一紙

一子故の闇に

1

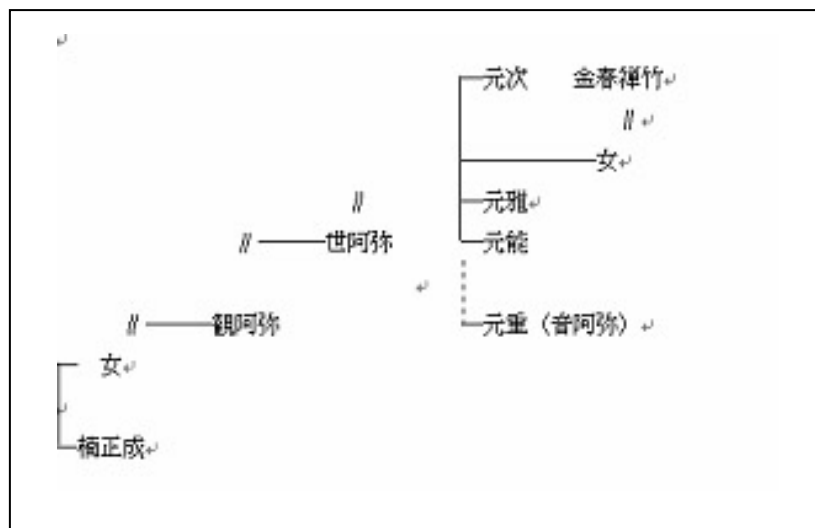
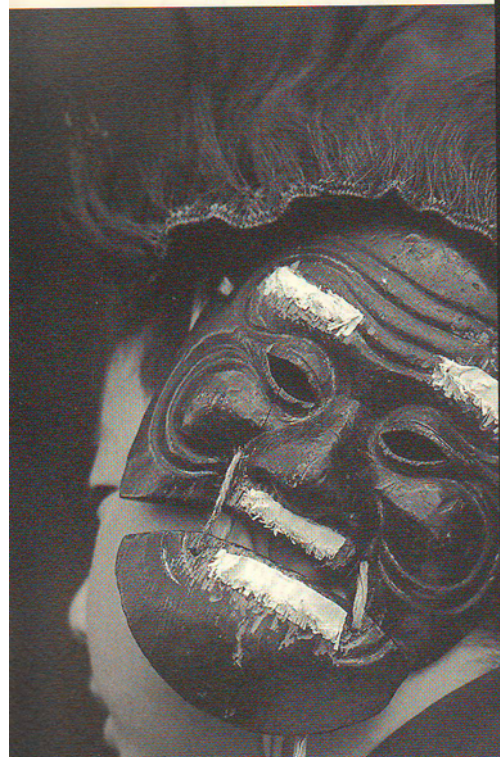
世阿弥は70にもなろうとする頃に長子元雅（善春）を32の若さで伊勢安濃の津で亡くし、悲嘆のあまり「夢跡一紙」（むせきいっし）を書き付けた。

さても去八月一日、息男善春、勢州安濃の津にて身まかりぬ。（中略）あまりに思ひの外なる心地して、老心身を屈し、愁涙、袖を朽たす。（中略）「君ならで誰にか見せん梅の花」と詠ぜし心、まことなるかな。しかれども、道の破滅の時節到来し、よしなき老命残って、目前の境涯に、かかる折節を見ること、悲しむに堪えず。あはれなるかな。

（ 世阿弥「夢跡一紙」 ）

「あまりに思ひの外なる心地」とか「道の破滅の時節到来し、よしなき老命残って、目前の境涯に、かかる折節を見る」とその切羽詰った心境を切々と吐露している。この元雅の死後2年後に世阿弥は將軍足利義教の命に逆らったかどで、佐渡に配流されている。その没年、所は定かではないが80才頃、一説には大徳寺に分骨されたという。

世阿弥の父観阿弥清次は楠正成の義理の甥という説もある。（「観世福田系図」）以下に系図を示す。



また以下に世阿弥、元雅関連の年表を示す。

- | | |
|---------|---|
| 1 4 2 2 | 世阿弥出家、元雅「観世太夫」の座を父から譲られる。 |
| 1 4 2 7 | 元雅、興福寺の薪猿楽に参勤 |
| 1 4 2 8 | 元雅、醍醐寺清滝宮の祭礼猿楽参勤 |
| 1 4 2 9 | 足利義教、将軍職に就き音阿弥（元重）を寵愛す
世阿弥、元雅、仙洞御所への出入り禁止 |
| 1 4 3 0 | 世阿弥、元雅、醍醐寺清滝宮の楽頭職を罷免
元雅出家。元雅吉野の天河弁才天社で「唐船」を奉納演舞。その際
尉面「阿古父尉」（あこぶじょう）を奉納。面の裏面に「心中所願
成就円満也」と書いた。 |
| 1 4 3 2 | 元雅、伊勢安濃の津で客死（32歳）
世阿弥「夢跡一紙」「却来華」を書く。 |
| 1 4 3 3 | 音阿弥、観世太夫となる。 |
| 1 4 3 4 | 世阿弥、佐渡国に流刑（70歳） |
| 1 4 4 1 | 足利義教、赤松光祐によって暗殺される。（嘉吉の乱） |
| 1 4 4 3 | 世阿弥 没（？）大徳寺に分骨か？帰洛、死没年は分明ではない。 |

2

元雅の作品は30代までに書かれた作品でそう多くはないが、列举してみよう。

- 「隅田川」・・・母子の死別と再会（隅田川）
- 「弱法師」・・・父子の再会（天王寺）
- 「朝長」・・・源義朝の子朝長の自害。観音の祈り（青墓）
- 「歌占」・・・神子と幸菊丸父子の再会
- 「盛久」・・・由比ガ浜で処刑されそうになる平盛久を観音が救う（刀を両断）
- 「藤戸」・・・源氏の武者に海の浅瀬を教えてくれた漁師を口封じに惨殺する
- 「天鼓」・・・天下の名器の鼓を渡そうとしない若者を惨殺する

最も有名なのは「隅田川」であろうが、作風は複式夢幻能を完成させ、幽玄な世界を演出した父世阿弥とは違って、よりリアルな演出、内容も残酷な人間の運命を描く。

そのなかでも「朝長」は平治の乱で敗軍の将となった源義朝の次男朝長の最期とその鎮魂を描いたものである。この作品はその後の世阿弥・元雅の運命と重ねてみると符合する点が多い。平氏＝足利義教、長田＝音阿弥、源義朝＝世阿弥、朝長＝元雅と置き換えてみ

ると、横暴なる將軍義教によって仙洞御所への出入り禁止、醍醐寺清滝宮の楽頭職を罷免された世阿弥・元雅の不遇な晩年の姿が浮かびあがってくる。しかも興行の一切を世阿弥のかつての養子音阿弥に奪われ、2年後には元雅は伊勢安濃で義教の家来斯波兵衛三郎に暗殺され（「上島家文書」）、その2年後、観世太夫の地位を音阿弥に譲らない世阿弥は佐渡に流刑に処せられる。

朝長は16歳、13歳の頼朝の兄ではあるが、長男の義平ほどに武芸に優らず、内裏守護の合戦で源氏が大崩れとなって落ち延び大原越えにさしかかった時、膝の口を深く弓で射抜かれ、美濃青墓の地で、東海道を落ち延びようとする父義友に「足手まといになるから、殺してくれ」と懇願し、討たれた（一説に自害したとも）。その後、義友は家臣長田を頼るが、その屋敷の湯殿で殺害される。



こういった平治の乱における悲劇の武将朝長は、そのまま元雅の姿に重なる。「魂（たましい）は善所に赴けども、魄（肉体）は修羅道に残ってしばし苦しみを受くるなり」

元雅は將軍の庇護からはずれ、越智氏の領する吉野天河に出かけて行く。天河は南朝の勢力圏であり、このころ北朝と南朝は一時的な和睦からまた、北朝が正当性を主張する時代に突入し、両者の関係は厳しい時代に入っていた。だから將軍にとって、南朝方に近づいて行く元雅の行動は許しがたいものがあつた。世阿弥が佐渡に流されたのもただ、観世太夫の地位を渡さないで抵抗したという以上の南北朝の政治的問題がからんでいたという見方もある。



元雅は伊勢安濃で客死する2年前（1430年）に天河弁才天社に赴き、能「唐船」を奉納演舞。その際演舞に使った尉面「阿古父尉」（あこぶじょう）を奉納。面の裏面に「心中所願、成就円満也」と書いた。能「唐船」は船争いで日本に残された中国人が日本人妻との間に子をつくり、やがて中国の本妻との間の子が日本に会いにやってきて困難はあつたが無事父子ともども中国に引き揚げるという話である。鎌田東二は「元雅と天河」の中で義兄弟ともども仲良く晴れて故国に帰れるというのは、元雅とその義兄弟音阿弥との和解を願ったからではないかと、その「心中所願」を推測している。しかしその「心中所願」は思い通りにはいかなかった。

元雅の作風には世阿弥とは異なった何かがある。世阿弥は申楽は「天下安全のため、かつは諸人快樂のため、六十六番の遊宴をなして申楽」と号し「そもそも芸能とは諸人のところを和げて、上下の感をなさしむこと、寿福増長の基、仮歳延年の法なるべし」「されば、

いかなる上手なりとも、衆人愛敬欠けたる所あらんをば、寿福増長の為手とは申しがたし」などと「風姿花伝」で説いているが、元雅の曲に至っては「寿福増長の基」「諸人快樂のため」「天下安全のため」「諸人のこころを和げ」などということはあまり意識されてはいない。むしろ一直線に悲劇的な人間の運命に突入していったかの感がある。これでは流行に敏感な義教の眼にかなうはずがない。



そういった元雅の傾向をよく表しているのが「歌占」（うたうら）であろうか。

「歌占」はいったん死にかけた男が地獄を見、甦って総白髪となった占い師の話である。

しかしここに描かれているのは幸菊丸というその子との再会談だ。そして再会の喜びの前に地獄の曲舞（くせまい）が舞われる。この曲舞は観阿弥の「嵯峨の大念佛の女物狂の能」にあったものだが、世阿弥が母子再会の「百万」ではめでたい踊りに変換したのを元雅はわざわざ観阿弥の地獄の曲舞に戻して舞わしている。

一生はただ夢のごとし。誰か百年の齢を期せん。命は水晶の泡。魂は籠中の鳥の(須臾に生滅し、刹那に離散す)

三界無安猶如火宅　・・・シテ

親子の再会という、元雅の中心テーマは脇に迫いやられてむしろ人間の世の地獄の責苦が語られている。同じく父子再会談の「弱法師」でも再会の喜びは後景に迫いやられ、父から義絶されて家を追い出されたショックで盲目になったことが逆に心眼を鍛えたこと、世の性なき人々にぶつかりながらよろける姿の浅ましさをむきだしにしてその苦しみを舞う。

3

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな（後撰集 1 1 0 2）

人の親のころは決して闇ではなく分別のある決心も可能なはずなのに、なぜか子どものことになると、わけもわからず迷ってしまう。

この歌は、紫式部の曾祖父であり、貫之とも親しく交わった三十六歌仙の一人藤原兼輔（かねすけ 元慶一～承平三：877～933）の歌である。

元雅の「隅田川」では前半にシテ（狂女）が「げにや人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、いまこそ思ひ白雪の」と歌っている。

藤原兼輔と言ってもぴんとこないだろうけれど百人一首の「みかのはら」の歌の作者と

いえば少しはわかってもらえるだろうか。

みかの原わきて流るるいづみがわ　いつみきとてか恋しかるらん

さて、この「人の親の心は闇にあらねども」の歌は「歌の詞書には太政大臣藤原忠平がまだ左大将であった頃、節会の相撲で勝利し帰還して祝いを行っているところに中将兼輔が招かれ、退出しようとするのを引き止められ、二次会になって、話が子どものことに及んだときに詠んだ歌だとある。

派生歌には

花をらむ心もそらに成りにけり子を思ふ道におもひみだれて（大江匡衡）

なき影の親のいさめはそむきにき子を思ふ道のよわさに（藤原定家）

敷島やこの道なくば子の道に迷う心のやみははるけし（正徹）

しらざりし誰もねざめの秋の雨の子をおもふ道にふるは涙を（藤原惺窩）

兼輔（かねすけ）の歌は多くの文人に影響を与えたようだ。それだけ、子への愛情の盲目的な不可解さが彼の歌には巧みに表現されているからであろう。



兼輔は俗には堤中納言（物語の「堤中納言」とは無関係）と呼ばれた。兼輔の家は紫式部の源氏執筆の家とされている今の廬山寺（御所の東、荒神口府立医科大学の西）のあたりで、西手寺町通りを中川という川が流れていた。（鴨川と桂川の間を流れる川の意。別名京極川。「源氏物語」空蟬の巻に中川の宿が登場する。）また少し東手に行くと鴨川が流れており、邸宅がその堤にまでおよんだところから兼輔には堤中納言の名が付けられたと言われている。この地に貫之などの当時の歌の指導的人物が集い宴を催したとだろう。

兼輔の長男雅正（まさただ）の孫が紫式部でこの家系はさして豊かでなかったの一族でこの邸宅を使いまわしていたのだらうと推測されている。廬山寺は現在キキョウの寺として知られ、秋にはりりしい桔梗が丈高く咲いている。

2014. 3. 28

（３）棺一基——大道寺将司

1

大道寺将司は1974年、三菱重工本社ビル爆破事件にかかわり翌年逮捕され、東京地裁一審で死刑判決、1987年最高裁が上告を棄却、確定死刑囚となって東京拘置所に収監されて在獄38年。2010年癌が発見され闘病生活を送っている。

句集の題名は本人の意向により決められた。

棺一基四顧茫々と霞みけり

私の所持している版では1996年～2012年の間の句、約1200句が収録されている。

夏深し魂消る声の残りけり

春の雲刑死の友の自若かな

縊られし晩間匂ふ桐の花

垂るる紐振れ止まざる春一番

霧の朝無一物にて逝きにけり

大道寺将司の句集を読んでいると「いいな」と思う句には「刑死」を知った後の句であることが多い。ここに挙げたのはその内の五句である。送ったものの寂寥がここにはある。自らの死と対面する句としては

行く年の生きのびて知る苦さかな

花影や死は^{たく}工まれて訪る

誰がための弔鐘響く夏^{ゆうべ}夕

向日葵の裁ち切られても俯かず

墓碑銘は^{くえ}俱会一处とや萩の花

石仏の跡無残なり涅槃^{に・し}西風

風船の黄泉から戻る途次ならむ

魂魄^{きまよ}の彷徨ふばかり雪解川

秋蟬^{しゅうせん}の翅一枚を形見とす

地図もたぬ死の道ゆきやあかのまゝ

2

自分の立ち位置を確認している句、6句。

狼は檻の中にて飼われけり

凍蝶^{いてちょう}や監獄の壁越えられず

革命の夢破れたり遠花火

飄々と己が途行く雨の蝶

風音の慟哭となり春逝けり

ででむしや汚濁まみるる身の重さ

これらの句にぎっしりと詰め込まれている人生への想い……

3

母への想いの句、5句。

花の日に花も贈れぬ囚獄^{ひとや}かな

北の辺に耀^{かがよ}ひそめし旱星^{ひでりぼし}

その時の来て母還る木下闇^{こしたたやみ}

母死せるあした色濃き額の花

ははそののははのいまさぬ四月尽

4

獄という狭くかつ監視状態で過ごす人間の特異な、しかし普遍性をもった感性について、3句。

差し入れの甘夏薫る人屋かな

秋の蝶病気見舞ひに来る窓辺

余寒なほ舎房に響く施錠音

5

かなたを遠望する句、1句。

辛夷^{こぶし}咲く山に千古の光満つ

2013.12.12

(4)「二人静」(ふたりしずか)

1

数年前、京都の神泉苑の春の祭りで、静御前の舞を見たことがある。池に渡された半円の橋上でわずか10分に満たない舞だったと記憶する。

平安時代日照り続きの京に雨



を降らせようと後白河法皇が100人の白拍子に舞を舞わせ、その100番目に舞った静がみごと雨を降らせたという伝説がある。その後住吉で雨乞いのために踊ったとき義経と知り合い妾となった。

その後の哀切な物語は「平家物語」「吾妻鏡」などに伝えられている。落ち武者となった義経と吉野山中で別れた静は吉野執行（修行僧）に捕らえられ、京都の北条時政に預けられる。時政は母、磯禅師と共に静を鎌倉に送る。このとき静は義経の子を宿していた。

鶴岡八幡宮前で頼朝は静に舞を舞うように促すがなかなか応じようとしない。みかねた頼朝の妻政子の説得でしぶしぶと静は舞を舞った。

しづやしづしづのをだまきくりかえし

昔を今になすよしもがな

（しづの織物の丸く巻いたおだまきから糸が次々に繰り出されるように

昔の盛時が次々に今ここにとって替わるようにできる力があればいいのに！）

この義経を慕う歌に頼朝は激怒するが、政子のとりなしでその場は収まる。問題は生まれてくる子どもだ。女なら生かしても男なら生かさぬという頼朝の厳命を覆すわけにはいかない。結局生まれてきた子は男の子で、泣き叫ぶ静から母が奪い去るようにして差し出された子どもは由比ガ浜に沈められた。

謡曲「二人静」はこの悲劇を題材とし、吉野山中勝手明神前で菜摘み女に取り付く霊（静前シテ）と本来の霊（静後シテ）の双極の舞だ。相舞は「一角仙人」のように二人の舞がずれる面白さを狙ったものもあるが「二人静」は、ずれてはいけない相舞で、極めて舞うことの難しいものとされている。

2

話は変わるが、中森明菜の歌に「二人静」という歌がある。1987年に「難破船」（私は愛の難破船）を歌い2年後Kとの恋愛沙汰で自殺未遂、1991年に映画「天河伝説殺人事件」の主題歌として歌われたのが「二人静」だ。

おろかだと笑われても

あなたを追いかけて抱きしめたい

つむじ風に身をまかせて

あなたを海に沈めたい

（中略）

たかが恋人をなくしただけで

何もかもが消えたわ

ひとりぼっち誰もいない

私は愛の難破船

(「難破船」)

このデスペレートな「難破船」から自殺未遂を挟んで「二人静」へ至る。死んだ女は甦って歌う。

『きっと、愛しすぎたから・・・』
散り急ぐ花びらを時間の背中に
殺めたいくらい愛しすぎたから・・・
添い寝して永遠に抱いてあげる
いい夢を見なさいなうたかたの夢を
夜桜がさわぐ



幸薄い蜉蝣の衣を脱ぐように
凜とした生き方の自分を見せたくて
焦がれそうなほど哀しすぎたから・・・
添い寝して三日月を枕に眠れば
魂は蘇って火の鳥に変わる
天の川キラリ

(「二人静」)

蘇って魂は何処に行くのか・・・
二人静は早春の野にも咲いている。

2014. 3. 6

(1) NON C'É あなたはいない——ラウラ・パウジーニ

1993年にサンレモ音楽祭の新人部門で「La solitudine」(孤独を抱きしめて)を歌って優勝したラウラ・パウジーニが10周年2002年にアルバム「ベリー・ベスト・オブ・ラウラ・パウジーニ」を発売、その10年間の粋を集めたアルバムとなった。スペイン語歌唱 MI RESPUESTA (ハートを信じて) 英語歌唱 ONE MORE TIME (ワン・モア・タイム) を混じえ基本は母国語のイタリア語で歌っている。



この「NON C'É あなたはいない」という歌を聴いてみると、これが恋を失った女の歌とは思えないような広大な愛の世界が歌われていて、圧倒される。これは決して失恋の歌ではない、むしろ愛の世界をいっそう深めていこうとする激しい情熱の走路線を感じる。とやかく言ってもちょっとわかってもらえないだろうが、まずは聞いていただきたい。しかしその前に一様歌詞を全文掲げておこう。

あなたはいない

あなたはもう電話にでない
私の希望はすべてラインにかかったまま
こんなに夢中になるなんて思わなかったのに
あなたは突然去っていった
私の人生を空っぽにして
答えもなく、あなたは何も残してくれなかった

あなたの香りはない… ない
あなたの息は私の顔に… ない
あなたのイチゴの口は… ない
あなたの髪の毛の甘い蜂蜜は… ない
心にはあなたの毒しか… ない
この恋に逃げ道は… ない
私にはもう生きがいが… ない
私の魂を救う術は… ない

狂った夜につながれ
あなたのためなら牢に入ってもいい
私には一度きりの人生では足りない
夏の空に湧き起こる雲
あなたは私に向かい来る嵐
私の日々の夢をかき乱し
なぜ急いで行ってしまったの

心にはあなたの毒しか… ない
この恋に逃げ道は… ない
私にはもう生きがいが… ない
私の魂を救う術は… ない

神が存在するなら、私のことを忘れないはず
神と私の間に果てしなく黒い空があったとしても
神に祈り、絶対にあなたを探し出すわ
十回、百回、千回、生き返って

あなたのいないこの暗黒の人生
もう私にとってはあなたしかないのに
恋に限りがあるとしても絶対に越えてみせる
この虚しい日々にも限りなく愛する
あなたの家での、初めての時のように
その素振りが私を舞い上がらせた
あなたの中に私が迷い込んだように

あなたの香りはない… ない
あなたの息は私の顔に… ない
あなたのイチゴの口は… ない
あなたの髪の毛の甘い蜂蜜は… ない

ない… ない
ない… ない
ない… ない

「狂った夜につながれ/あなたのためなら牢に入ってもいい」という情熱。

また男は男で「あなたは私に向かい来る嵐/私の日々の夢をかき乱し」だから「心にはあなたの毒しか… ない non c'è che il veleno di te nel cuore/この恋に逃げ道は… ない/私にはもう生きがいが… ない/私の魂を救う術は… ない」私には一度きりの人生では足りない、だから「絶対にあなたを探し出すわ/十回、百回、千回、生き返って」あなたに迷い込んだ私のすさまじい執念、これが高壮で圧倒的なソプラノで歌われるのだから、男ならまいてしまうだろう。

4、5年前イタリアのカプリ島の山上にリフトで昇ったことがあったが、そのゆっくりと上昇するリフトから見えるティレニア海の壮大な輝ける視野がこの歌から思い出される。そうなのだ、イタリア歌唱の悲劇的な力強さが愛の乱流を見事に歌いきって新しい年にふさわしい力をいっぱい満たしてくれる。

2014. 1. 7

（2）家入レオ——「太陽の女神」、あるいは**家入一真**——「ひきこもり」

東京都知事選の報道番組を見ていると立候補者の中に時々黒い皮ジャンで黒い帽子を被っている男性がまるで選挙戦の争点にさえならないようなことを途切れ途切れつぶやいているのに気づいた。その男性は「ひきこもりを何とかみんなで考えましょう、それをネットでフォローして・・・」というようなことを伏目がちに呟くのだ。いったいどういう人物なのだろうと私もネットで彼のことを調べてみた。



家入一真——1978年生まれ。現在35歳。福岡県の高校でいじめに会い中退、3年間引きこもり大検資格に合格。東京芸大の予備校を卒業し、ウェブデザイン技術を習得し、株式会社paoerboy&co.を創業、29歳のときジャスダック市場へ最年少で上場した。

これでなぜ彼が「ひきこもり」にこだわっているのかがわかった。ただ、ひきこもりの中では立志伝の人ということになるのかも知れない。しかし立候補者の中ではあまりに異色だったので私も注目することになった。なんとなくおもしろい！ひきこもりのためにがんばってほしい。



ところでこの事件の中でまた偶然にもイエイリという別人物に別件事故で出くわすことになった。その人の名は家入レオ。本名ではない。映画「レオン」に由来するとか、手塚のレオに似ているからとかいろいろ言われている。彼女は2012年に「ripe」でその年のレコード大賞最優秀新人賞を受賞した現在

19歳のピチパリだ。

その代表曲などを聞いているうちになんだかよく聞いていた曲であることに気づいた。

あれから数えきれない季節重ねて
尖ってた波は脆く砕け散ってく
万夢のキャンパス広がっていく景色を眺めて
僕は 君を探してる

花は咲いてた 壁に向かって
自分以上になること 急ぎ過ぎてしまったのかな？
見るもの全て 愛しく思う
君といたいんだ 他になにもいないから

この爽快で華々しい曲は、テレビドラマ「海の上の診療所」（松井翔太、武井咲主演）の主題歌だ。この他愛もないラブコメディをよく見ていたのでこの曲に慣れ親しんでいたのだろう。たぶん彼女の今までの曲の中で最高傑作と言っていいだろう。

彼女は幼い頃両親と別れて親戚の家を転転とする日々をすごしたようで、尾崎豊の「15の夜」に大きな影響を受けたという。曲はしっかりとっていて人生の渋みを低音に抱えながらも強い意志の叫びが心を打つ。

愛なんていつも残酷でもう祈る価値ないよ

day by day 君は逃げようとした
聞こえないふりをしてた
でも気づいていたね

Ah 誤魔化せない 日々を
そこに救いがないことも
(“Bless You”)

2014. 1. 25

（3）ラフマニノフ「ピアノ協奏曲第5番」

1

ラフマニノフのピアノ協奏曲といえば、第2番、第3番がもっともよく知られているし、コンサートでも人気の曲であろう。もっともラフマニノフには3番の次に4番というピアノ協奏曲があって、これは鬼才ベネディッティ・ミケランジェロの名演があるのだが、殆ど聞かれていないだろう。丁度チャイコフスキーには2番、3番

SERGEI RACHMANINOFF/ALEXANDER WARENBERG
PIANO CONCERTO "No. 5"

Sergei Rachmaninoff:
 Symphony No. 2 in E minor Op. 27
 arranged as Piano Concerto, by Alexander Warenberg.
 (Publisher: Boosey & Hawkes)

1. Largo-allegro moderato	18'56
2. Adagio-molto allegro	13'15
3. Allegro vivace	10'05
Total time:	42'24

Wolfram Schmitt-Leonardy, piano
Janáček Philharmonic Orchestra, Theodore Kuchar
WORLD PREMIERE RECORDING

というけっこうイケテル協奏曲がありながら、あのホルンの一吹きから始まる序奏を持つ1番しか聞かれないのと同じである。

そういう訳だから5番といわれると？ソナモンあったかなと誰しも思うに違いない。わたしも怪訝におもって調べてみるとなんとそれはラフマニノフの交響曲第2番のアレンジものであった。オランダのプロデューサーがヴァレンブルグという作曲家に依頼して2007年に録音、CDとして売り出した。初演はピアノ：ヴォルフラム・シュミット、指揮：テオドル・クチャル、ヤナーチェクフィルハーモニー管弦楽団である。

主に交響曲第2番の1，3，4楽章が使われている。対照表を作ってみると、

交響曲第2番	ピアノ協奏曲第5番（編曲）	
		編曲部分
第1楽章（S 1）	第1楽章	S 1
第2楽章（S 2）	第2楽章	S 2、S 3
第3楽章（S 3）		（S 3→S 2→S 3）
第4楽章（S 4）	第3楽章	S 4

ピアノ協奏曲第5番は交響曲第2番の1，3，4楽章を主に使っていて、交響曲の第2楽章は中間部だけが部分的に使われている。

シンフォニーと協奏曲の違いは歴然としていて、協奏曲では主旋律をピアノが装飾的に演奏するのでシンフォニーとはまるでイメージが違ってしまっている。しかも第1楽章にはカデンツァまでついているから相当に構成的な印象が違ってくる。第1楽章も悪くはないが、編曲で成功しているのは第2楽章（交響曲第2番の第3楽章）だろう。このアダージョはその甘美さでシンフォニーでは有名な部分なのだが、ピアノの華麗さが加わって、いっそうノスタルジックな伸びやかさを表現するのに成功している。



ピアノ協奏曲第5番は全編ラフマニノフ・サウンドがあちこちに聞こえてくるが、こういう楽しみ方もあるのかもしれない。リストはベートーベンの交響曲全曲をピアノ・アレンジしたが、あれは、交響曲のピアノ版であって、協奏曲アレンジではなかった。だからピアノ版の面白さはあっても結局ベートーベンのシンフォニー原曲のすごさにはかなわないのだ。

しかしこういう風に交響曲を協奏曲にアレンジしてみるとそれなりの楽しみ方も出てくるものだ。ヴァレンブルグという人はどういう人物なのか知らないが、作曲は言うまでもなくラフマニノフの書法にかなり通じている音楽家に思える。このアレンジ版の第2楽章アダージョだけでも楽しい音楽が

開けているのが実感される。ゴーストライターを使って物語を操作するよりはっきりとアレンジ版と断ってデビューしてみるのはたとえCDが売れなくてもわれわれ現代の文化にとって好ましいことには違いない。

2014. 3. 11

(1)薄白色の余韻——小林且典 展覧会



11月に兵庫県立美術館で小林且典（かつのり）の展覧会「薄白色の余韻」が開かれている。11月3日、私は何気なくこの展示室に迷い込み不思議な浄福感にとらわれた。一歩足を踏み入ると、もはや抜け出せない何かにつかまったという感じで、こういう体験はめったにするものではない。

小林の仕事は「彫刻」という分野のものなのだろうが、それを写真彫刻に延長し、写真としての世界に展開するのだ。実際の彫刻（小さな瓶、壺など）のインスターレーション（展示、装置）もあるのだが、その弱音器によるリズムを写真に転送するのである。まさしく軽やかで清明な音楽が流れてくるような展示室のけっこう高い天井の解き放しのなかで、ピアノシモのさざめきがモノクロームな陰翳の中に、もれて流れてくる。

作者は東京芸大卒業後、イタリアミラノのブレラ美術アカデミーに留学、その地で評価され、2010年にフィンランドに滞在、現在は東京に在住する。

当日のプログラム解説から金井 直の文章を引用する。（写真は当日のプログラム掲載のものです。）



つつまじやかな小瓶の排置、律動。卓上での展開、変奏。しばしば指摘されるように、小林且典の近作には、G・モランディの絵画を、そしてモランディのアトリエをとらえたL・ギッリの写真を思わせる詩学がある。反復が、かすかな差異を豊饒に変え、余白もまた抑揚の舞台として彩りを重ねる。ボローニャの画家が磨き上げた弱音器付きのモダニズムが、半世紀の時を経て、小林の手仕事のうちに蘇るかのようだ。静かな、しかし、端然たる、毅然たる運指。その響きに魅了される者は数知れない。私もそのひとりだ。

2013. 11. 5

(2) 雨宿り——続「京都日本画新展」に寄せて

続「京都日本画新展」が昨年、5年目の「京都日本画新展」の終了後、後を引き継ぐ形で開催された。

初日の1月18日に私は、伊勢丹7階の美術館「えき」で見た。

展示場では20代から40代にかけての作家39作品が展示され、大賞は若狭悌尚の「甘雨」だった。黒いグリーンをあしらった樹木に降り注ぐ雨のアトモスフィアを描いている。

日本画といえば、西洋の油絵とは全く異なる様式の、ある決まりきった表現法が思い浮かぶが、今回の展覧会の絵はそういう予想を全く裏切ってまるで後期印象派の絵を見ているみたいだった。この「甘雨」もそうだが、他に数点を挙げれば、「灰色の空、まだらな地上」「花影」「いつかその時がくるまで、いつまでも」「ほころぶ」「雨宿り」などをあげることができるだろう。

私はその中で賞こそとっていないが三橋卓の「雨宿り」がとくにおもしろく感じた。雨が降って、喫茶店か何かの店に入って一休みしている若い男の後姿が左に見えている。中央にも人物が。そうやって見ていくと各所に人の姿が見えてくる。全体に白くくもった



雨宿り



「いつかその時がくるまで、いつまでも」

ような窓ガラスにモイストチャーな雨が降りかかっている。左にごみ箱が、手前に折りたたんだ傘が立てかけてある。全体にしめやかな雨の音と、湿った蒸気で遮蔽された空間が不思議な諧調で閉じられた世界をかたちづくる。たぶん雨はやみそうもなくこの偶然によってひと時の限られた物語シーンが現れたのだ。

出品作品にこういった夢幻的な時のたゆといを描いた作品が多く、(その抽象化の極としては「いつかその時がくるまで、いつまでも」がある。) それはもう「日本画」という従来のイメー

ジから遠くかけ離れた自由さで日常のリリズムを描きうることを示していた。——京都といえども中世以来の日本画の中心地であるのだが、この変貌はいったいどういう意味を持つのだろうか。

何が京都的なのか、言葉で言い表すことはむづかしい。その香りの高い気品と嫋かな雰囲気のうちに秘められた芯の強さは東京の文化にはないが、それだけでは手に攔んだ砂が指の間から洩れていくのに似た感がある。もっともそうしたものはきわめて日常的であって、取り立てて声高に叫ぶものではなく、身について自ずと内部から滲みでてくるものである。

現在の混沌とした美術の状況を反映してそれぞれの表現方法は様々であったが、今回出品された作品すべての根底に「京都」から受け継いだ何ものかを確かにみてとることができたように思う。

（ 尾崎正明 前京都国立近代美術館長 序言 ）

「何が京都的なのか」と問えばそれは、そうとう難しい問いになるだろうが、伝統と革新のねじれを生きてきた近代の京都には何か新しい文化的な力が育まれているのかも知れない。「いつかその時がくるまで、いつま「いつかその時がくるまで、いつまでも」でも」



甘雨



花影

(1) 映画「ミュンヘン」(Munich)

1

1972年9月5日ミュンヘンオリンピック開催中にパレスチナの過激派「黒い九月」のメンバー8名がオリンピック村のイスラエル選手団宿舎に押し入り、抵抗した選手2名を射殺、残りの9名を人質にし、イスラエルに収監されているパレスチナ人200数名の解放を要求、ドイツ警察の対応にもかかわらず、人質は全員殺害され、過激派は全員逃亡した。オリンピックは追悼式の後34時間後に再開された。

この事件へのイスラエルの報復テロはJ. ジョナスのノンフィクション小説「標的は11人 モサド暗殺チームの記録」で描かれ、この作品をもとに、S. スピルバーグは2005年に映画「ミュンヘン」(Munich)を製作した。



7ヶ月の身重の妻を持ちながら、建国の英雄の息子アヴナーはイスラエルメイア首相の立会いのもと襲撃に加わったパレスチナの過激派の暗殺隊のリーダーを依頼される。報復と愛国心に燃えるアヴナーは引き受けるが、それは家族を犠牲にし、自分も命をいつ落とすかもわからない大仕事だった。

暗殺隊として結集されたのは4人

- スティーブ・・・車両係
- ロバート・・・爆弾係（もと玩具職人）
- カール・・・事後処理係（紳士）
- ハンス・・・文書偽造係
- （アヴナー・・・隊長）

彼らはスイス銀行の資金を活用しながら計画を順次遂行していく。

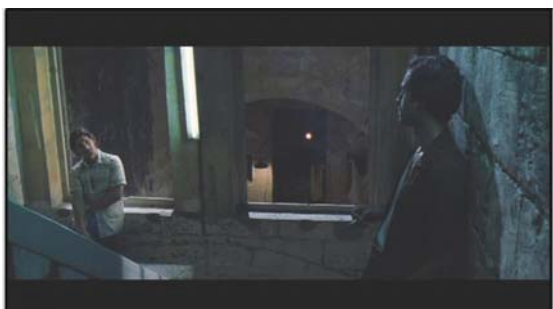
- ①ローマ ズワイテル（アラファトの従兄弟、「アラビアンナイト」のイタリア語翻訳者） 射殺
- ②パリ ハムシャリ（ファハタ・フランス） 電話爆殺
- ③バイルート カマル・ナセル以下3人 +イスラエル軍 射殺
- ④キプロス フセイン・アル・シール ベッド爆弾
- ⑤アテネ サイド・ムシャシ 爆弾
- ⑥ロンドン サラメ（ミュンヘン虐殺の首謀者） 失敗

- ・オランダ女のハニートラップに引っかかってカール刺殺
- ・女の殺害に関してロバートが疑念（俺たちはもっと高潔でなければならない）離脱。
ホーレンのボートハウスで女を射殺。全裸を服で隠そうとしたアヴナーを制しハンスは死体をむき出しのままにして去る。後に後悔する。
- ・ハンスは河岸で刺殺される。ロバートも事故で爆死する。

⑦スペイン・タリフ サラメ アヴナーとスティーブ2人で決行、失敗。

2

この映画の面白さは、勿論愛国心によって暗殺役を引き受け成功させて行くアヴナーの姿と生命の誕生という家族の1プロセス、生命の誕生の重さに涙する男の心に生まれる亀裂、——彼は後半では自分がテロリストに狙われているのではないかと自室の爆弾装着を確かめずにはおられなくなり、またアメリカに移住してからは毎晩テロリスト時代のトラウマのフラッシュバックに襲われる——も確かにこの映画の主題のひとつとして検討に価するのだが、今ひとつアテネでの暗殺遂行の途中で偶然出くわし、同宿する「黒い9月」のリーダーとの和やかな一夜の会話の部分だ。彼らは敵同士だと思って最初は銃撃戦寸前



までに至るが、アヴナー達は自分たちを「PLO、ドイツ赤軍、アフリカ民族会議」だと偽り「黒い9月」のリーダーのアリ達は「ETA、バスク自由と祖国」だと偽り互いに衝突を回避し、2日間を過ごす。

アヴナー：国家建設など（パレスチナ

ナ難民には）夢物語だ。そんなにオリーブの

木がほしいのか？ かたくなな攻撃を続けるから野蛮人だと非難されるのだ。

アリ：イスラエルは消滅する。われわれは100年掛けても必ず勝利する。欧州の赤なんか（ETA, ANC, IRA）どうだっていいのだ。世界革命なんかどうでもいい。われわれは国が欲しいのだ。たとえどんなやせた土地であっても。国のない哀しみを知っているか？ 祖国がすべてなのだ。お前はユダヤのシンパみたくに見えるが、俺のおやじはユダヤ人を処刑はしていない。どうもドイツはユダヤ人に甘すぎる。それは贖罪意識がそうさせているのだ。

和やかな一夜だったが、二人は数日後また再会する。

それはムシャシ襲撃の夜、銃撃戦となり、車で逃げようとするアヴナーとアリは出くわしてしまう。互いに驚くが和やかな対話の相手が敵同士だったと知り、また、銃の引き金を引かねばならなくなる。多方向からの銃弾の一発がアリに命中し、一瞬不動の体勢になるがやがてそのシルエットは地上に崩れ落ちた。

この映画の中では暗殺遂行のプロセスが非情に追及されるが、この箇所は唯一パレスチナゲリラとユダヤのテロリストとの内容あるエピソードになっている。



さて、これらの物語を理解するには、1948年のイスラエル建国、1967年6月の第3次中東戦争（イスラエルがエジプト、シリア、ヨルダン、イラクに侵攻し、ヨルダン川西岸地区、エジプト領ガザ地区、シナイ半島、ゴラン高原を占領）、1973年10月の第4次中東戦争（アラブ諸国は結束し、イスラエルは一時シナイ半島西部とゴラン高原の一部を失い更に自国領土に進攻の危険が迫るところまでいった。しかしイスラエルは持ち直しゴラン高原ではシリア軍を追い出し、シナイ半島ではエジプト軍を撃破した。その後アメリカとソビエトの仲裁によってほぼ16日後に停戦が結ばれた。）などについて知っておくと多分より、理解が早くなるだろう。

映画「ミュンヘン」はこうした複雑な時代背景の下に起こった事件だったが、国際的なイベントをひとつの政策的アピールの場にしようとする行為はとどまることを知らない。それだけ、世界の政治的対立は複雑にもつれ合って簡単ではないということだろう。

ソチ五輪関連で言えば2月21日にウクライナのスキーパラレル大回転の女子選手がヤヌコヴィッチ前大統領の国民弾圧に抗議して試合をボイコットして帰国した。

その後ウクライナ情勢は一気に過熱化し、クリミア半島のロシアの強引な実効支配が続けられようとしている。

2014. 3. 5

<付録>

ところで、中東の政治情勢はあいかわらず複雑でわかりにくい、宗教的な根っこの部分を少しまとめておこう。（以下内田樹・中田考「一神教と国家」を参考にした。）

<表 1>

宗 教	名称の由来	啓 典	言語
キリスト教	イエス・キリストから	「 新約聖書 」四福音書：マタイ福音書 マルコ福音書、ルカ福音書、ヨハネ福音書	ギリシア語 ラテン語
ユダヤ教	民族名 から	「 ヘブライ語福音書 」(第一聖典) モーセ五書：創世記、出エジプト記、レビ記、 民数記、申命記。 「タルムード」(第二聖典) モーセの 口伝：ラビの学説集	ヘブライ語
イスラム教	「服従」「帰依」 の意から	「 クルアーン 」(根本経典) アッラーの啓示を ムハンマドが記録。立法者は神のみ。キリス ト教の司祭、ユダヤ教のラビは余計なもの。 「 ハディース 」預言者ムハンマドの言行録	アラビア語

<表 2>

宗教	居住形態	経済・産業	文化	価値観
キリスト教	定住的	牧畜・農耕	個人主義的	信仰。内面性
ユダヤ教	遊牧的	商業・交易	共同的	律法。行為・実践
イスラム教	遊牧的	商業・交易	共同的	信仰。行為・実践

(2) るろうに剣心

1

いつの頃だったろうか「るろうに剣心」のテレビアニメを見て直感的に好きだな、と思ったりして時々見ることがあった。

志々雄と剣心の最終対決場面で、ベートーベンのソナタ第8番がかかっているのに驚いた



ことは今でも記憶に残っている。この曲は純な恋心を実にみごとに無骨男が作曲したもので、一般にいじらしい恋愛場面の BGM として使われることがよくあるのだから、別に驚くことなどないのだが、それがすさまじい最後の決闘シーンに出てきたから驚いたのである。それは第 60 話「京都編」の剣心と志々雄との決戦の最終局面で剣心と対面して志々雄を庇っているユミの背後から志々雄がユミの肩を貫き通して剣心に一撃を加える場面だ。このシーンでいきなりこの曲がかかり始める。薄倅の花魁ユミを苦界から救ったのは志々雄ではあったが、なんというサディコ＝マゾヒスティックな場面か、志々雄の刀で後ろから肩を貫かれながらもそうして志々雄の有利になることをむしろ喜んで「私でも役に立てる」と滔々と語り死んでいくユミ。ここであの純情な曲がかかってしまうのだ！このシーンに驚かないものがあるだろうか・・・いや私のひとりよがりか？

この最終シーンを見て以後の剣心シリーズは見ていないから、それを見たのはおそらく 1996 年から 1998 年（この 3 年間で放映年月）の間であつたろう。漫画では 1994 年から 1999 年まで全 255 話が「週刊少年ジャンプ」に連載された。

世はソビエト共和国連邦がその 70 年の幕を閉じ、ベルリンの壁は崩壊し、阪神淡路大震災が起こった直後であつた。テレビ・アニメといえば核戦争後の世界を描いた「北斗の拳」（1984）が人気となり、「ガンダム」とは一味違った「エヴァンゲリオン」（1996）などがはやっていた時期であつたろうか。

「北斗の拳」は 1980 年代に同じく「週刊少年ジャンプ」に連載されたもので世界核戦争が起こるのを 199X 年と設定している。しかし、権力と愛の相克を描いたアニメでも「るろうに剣心」は「北斗の拳」とはちょっと違っていた。

2

この違いはなんだろう。

1 つは「北斗の拳」はあくまで起こりうるであろう 199X 年の近未来をふまえてはいるが、同じ核戦争後の世界をアニメ「風が吹くとき」（1987）ほどにはリアルに把握してはいない、という点「るろうに剣心」が歴史的観点と絡めあわせながら物語を進めているのと大きな違いがあること、2 つ目はたとえば南斗聖拳のシンに横恋慕強奪されたユリアとケンシロウとの引き裂かれた愛のドラマはいかにも空想的な設定になってしまっているのに、「るろうに剣心」における剣心と（妻）巴との悲劇的な敵対と愛の悲劇（「追憶編」）は極めて身近な話として迫ってくる点だろう。

1 つ目の点について少し付け加えるならば維新の正義を追いながらも鬼剣士であつた抜刀斎の血塗られた過去と、婚約者をそれと知らずに惨殺した剣心は妻巴が当の惨殺された男のフィアンセであつたという皮肉によって運命に呪われ、愛による救済をファウストにおけるグレートヘンのごとくには受けることができないという点にある。維新の大儀が成就した後に彼の＜贖罪＞は逆刃刀による＜殺さず＞の誓いに結晶するが、その絶対平和主

義、愛による虐げられたものへの救済はあの志々雄との長大な戦いの中に具現されたかに見える。



更に大切なことは「北斗の拳」が破壊された権力の樹立に唖々とする拳闘家の姿に焦点が絞られているのに、剣心たちは（暗殺剣の後継者であった志々雄も含めて）権力奪取した明治政府には絶望し、あろうことか志々雄にいたっては更に権力を明治政府から奪取しようとしていることだ。ここに語られているのは権力闘争の結末の暗い絶望的な姿なのだ。

「東京編」などで描かれている麻薬商人観柳の姿、庶民を惨殺することを正義と履き違えている特別治安部隊、政治権力によってただ権力のみを維持することに腐心する山県に代表される政治家たち。明治政府は裏切られた維新であったという観点だ。丁度比喩的にいえば、現代のソビエト連邦や中国のような独裁国家も、この裏切られた革命のどす黒い比喩なのだ。そこには権力的な粛清と弾圧、特権階級の経済的利権の独占、民族の弾圧、言論の弾圧と統制といったような＜理念＞を裏切る野望だけが突出していた。こうしたレジームに絶望したのが剣心であり、志々雄たちであった。

3

「東京編」は明治政府を転覆せんとする志々雄、十本刀たちと剣心たちとの壮絶な戦いであり、雄編である。十本刀たちとの凄惨な戦い（中でも安慈、宗次郎との）はそのどの戦いも漫画アニメとしての面白さを充分満喫させてくれる。そして声優涼風真世の繰り出す剣心の低くて落ち着いたきめぜりふ「・・・でござる」が視聴者を納得させ、安心させる。

しかし神のごとく沈着な剣心にもその若い血潮の時代があった。それが「追憶編」である。ここでは理想のためには流血をも辞さないひと切りの若者が剣を捨てるにいたるいかにも人間くさい物語が展開されている。いうなれば剣心という人間離れした男の本来の人生を形づくった核となる部分だ。

舞台は幕末の京都。倒幕のために容赦なく剣をふるって、抜刀斎と呼ばれ恐れられていた剣心は、ある晩京都所司代の見回り組の重臣を襲う。その中に結婚を目前に控えていた、江戸の下級武士清里がいた。彼は剣心に追い詰められて「死にたくない」と叫びながら執念の一撃を加えながらも惨殺される。このとき剣心の左頬に「ノ」の字についた刀傷はいつまでたっても消えなかった。知り合いから「怨念の傷は消えにくい」とひやかされる。

時がたち、桂小五郎などと連絡をとりながら暗殺を続けていく剣心の前に一人の酔いどれ雪道に倒れ伏している女が現れる。「雨の日にこそ匂い立つ」と評されるようになるこの美女を剣心は定宿に連れ帰り介抱する。やがて行き所のないこの女はこの宿に拾われて下働きをするようになる。名前を巴といった。しかしあろうことか、この女は剣心に惨殺された清里の婚約者だった。やるせない思いを晴らすため彼女は江戸からはるばる単身やってきて婚約者を殺した抜刀斎を探していたのだ。あやういふれあいが続くが次第に女は剣心に惹かれていく。



新しい暗殺計画のために剣心と巴は夫婦を装って大津の辺鄙な一軒家で百姓を始める。季節の移り変わりは美しく、作物の収穫も喜ばしい。剣心の中にも人を切らずに巴と二人で穏便に暮らすこの生活が人間らしい安らぎを与えた。しかしこの倒幕側の偽装工作には実は巧妙に隠された幕府方の剣心暗殺の謀略が潜んでいた。倒幕方の密偵が幕府方に寝返り、金銭を巻き上げようとしていた。

剣心と巴の間は仲睦まじく、本物の夫婦のような情愛が生まれつつあったが、ついにその重圧に耐え切れず巴はある晩酒語りにととうとう本当の身分を明かしてしまう。驚きながらも剣心は巴を初めて抱きしめる。こうして身もこころも結ばれたかに見えたが、この重荷に耐え切れず巴は、家を出て行く。そしてその向かった先のお堂には幕府の刺客が剣心と呼び寄せて待っていた。

こころ破れて剣心は雪道を巴求めて疲れ果ててお堂にやっとたどり着くが、屈強な刺客に襲われ最期の力を振り絞って向かうその刺客の刃に刺される寸前事態は驚く方向に転換する。刺されたのは身を挺して剣心の前に立ちはだかった巴だった。渾身の一撃で剣心は刺客を切り倒す。しかしそこには血まみれとなった巴の最後の声が弱弱しく響いた。彼女は剣心の左頬に小刀で右下がり「ハ」の字に傷をつけ「あ・なた」とかすかに言いながら絶えていった。(これが剣心左頬のクロス傷の由来だ。)

剣心に巴の残したものは大きかった。誰もが自分自身に突き当たり、生きている意味を悟るときがある。剣心にとって巴とはそういう女だったのだ。

2014. 1. 14

(3) ドラマ評 (1)

チームバチスタ「螺鈿迷宮」—Cure と Care

最終回が終わって桜宮家のターミナルケアの実態が実は医師の指示による安楽死であったことが暴露され、その螺鈿の間は焼却、爆破され、主要人物は自殺するという結末が待っていた。

この話は、桜宮家の8年前に起こった家族の秘密と翡翠院の終末期医療における「医療とケア」との対立葛藤を2本の軸に構成されたものである。

8年前、桜宮家の長女小百合は夜、恋人に会いに行く途中で、暴漢に襲われレイプされた。このことを知って激怒した長男、葵によって暴漢は刺殺されるが、葵は逃げる途中で崖から転落し、岩場の多い浜辺に打ち付けられ死亡する。——というのは父、桜宮巖雄（いわお）が作り上げたフィクションで実は彼は死亡と見せかけて蘇生させられ、秘密の迷宮で生活を始める。レイプ犯は病気で死亡したことに偽装され、それ以後奇怪な桜宮家の経営する翡翠院の終末期医療が続けられることになる。

そもそも若い頃、院長巖雄は自分の父の苦しみぬいた死に疑問を持ち、医療による延命治療を間違いだと考えるようになった。そのため自分で僧職の資格をとり自ら死者の葬儀を執り行うような人物である。翡翠院は老人介護センターであり、ホスピス施設であり、寺院を併設する終末期医療の最先端施設であった。

そして、翡翠院の螺鈿の間での看取りはいつも和やかな死に終わることによって評判だったが、必ず死後に院長が解剖をするという行為に厚労省の白鳥は疑問を持つ。

この件で同じ疑問を持った、かつての勤務医立花がその件を暴こうと乗り込んでくるが何者かによって殺されてしまう。奇怪なことにその立花の死体のA I 画像が小出しに白鳥の所に送られてくるのだ。しかもその素人っぽいA I 画像を撮影した当人を目撃した放射線技師戸山も浜辺で死体となってしまう。この撮影者はいったい誰か？やがてその人物は



死んだはずの葵であることが発覚する。こうして桜宮家の秘密が次第に明らかになり、息を引き取った直前の死体の緊急画像を秘密裏に特殊撮影することによって、ついにその安楽死の謎が解かれる。死者の酸素マスクに麻酔としても使われるキセノンガスを混合させ、安らかな死を演出していた

のだった。

かねてから安らかな死を懇望していた美智は緊急にすみれの助言で螺鈿の間に入るが、かけつけた白鳥、田口の説得で死を思いとどまる。

こうして話は結末に突入する。立花、戸山を殺したのは葵ではなく巖の妻、華緒であった。警察への手配が終わって、その警察が駆けつけた直後に螺鈿の間が火災で爆発し、巖雄、華緒、葵3人は焼死、小百合、すみれは助け出され、小百合が自首してすべての真相を打ち明ける。

ドラマの最後では生き残った美智とその娘、孫との再会が描かれ延命治療の正義が強調されるようになっている。もともと厚労省の白鳥はにどこまでも延命させることを守る医療側の代弁者であり、このドラマの結末も末期医療のあり方・・・安楽死（患者以外の者



が手を加えて安らかに死なす）を許さない立場を貫いている。しかし末期医療はそう単純ではなく、いたずらな延命を拒否する「尊厳死」の立場もあり、翡翠院の院長巖雄の立場もそれに近い考え方だった。ただ彼は患者、家族、医師の都合を勘案して死亡時期を調節し、安らかな死を人工的に演出していたという意味では尊厳死の考え方を逸脱していた。だからこの作品では裁かれざるを得なかったのだ。

それにしても死期の迫った患者・家族の苦しみは、ただいたずらな延命によって救われるものではない。そういう苦しみは「あんたたちに何がわかる」という美智の叫びによって代弁されていた。その辺をもう少し突っ込んで描けていたならいい作品になっただろうが、結局、最後は延命治療の勝利のような勧善懲悪スタイルで終わり、水戸黄門さまには勝てないというレベルで終わってしまったので、やはりミステリードラマだったんだ、という軽さをいかんともし難かった。

2014. 3. 20

（４）ドラマ評（２）

Dr.DMAT—瓦礫の下ヒボクラテス

—命の優先順位



阪神淡路大震災の頃から被災者の緊急支援の手薄さが問題となり、緊急の医療チームによる支援が必要と考えられた。そして2005年にはDMAT（Disaster Medical Assistance Team）災害派遣医療チームが結成された。災害発生直後に駆けつけ48時間～72時間の活動を想定する。（これ以外に東日本大震災以降は、精神医療を対象とするDPAT、72時間～3ヶ月や、公衆衛生を担当するDHEAT、72時間～1ヶ月などが考えられてきている）

DMATは短期間の救急医療を担当するため、被災者の**トリアージ**（優先順位を付けること——タグ付けで行われる。緑、黄、赤、黒の順に危険度が高い。なお黒は死亡ないしは回復の見込みなし。従って赤タグの患者が最優先の対象となる。）をすることが大事になる。このトリアージを間違えれば、助かるものも助からなくなる。しかもその上に同じ赤タグであっても誰を優先するか判断が必要になる。

ドラマの中では「ホームレスと大手商社の会長」、「通り魔の犯人と新婚早々のかつての同僚看護師」「次期総理候補とその第2秘書」などの優先順位をめぐって、大手商社の会長が有栖川病院長によって優先指示が出されたり、警察の都合で通り魔の犯人の治療が優先されたり、第1秘書の差し金で第2秘書より次期総理候補を優先させろという命令が出されたりする。

短期間の判断の優先順位は「救える命から、社会的地位、親類・縁者などの関係なく」なのだがその判断がまことに難しくそれをとっさに行わなくてはならない。そういう意味ではDMATの隊員には神業の判断が要求されるのだ。したがって見捨てられた患者の縁者からは恨まれる。

このドラマの主人公、響（ひびき）はまさしくこの矛盾から出発したドクターだった。



1年前の事故で運び込まれた妹、春子の治療に当たろうとしていて、傍の患者の救急を叫ぶ看護師の声に押されて、そちらの治療を優先した結果、妹の方は手遅れで意識障害をおこし、結果的には植物状態となって入院治療を続けることになる。ドラマの主題になっており、主人公の行動を規制するのがこの事件だった。第1話ではこの件が克明に描かれている。響の脳裏にはこの失敗が絶えずよぎって行く。トラウマとフラッシュバック。罪悪感と贖罪意識……。自信を失った響は外科医ではなく内科医となり、投げやりな診療を行う。そんな響が不思議なことに看護師長によってDMA Tの隊員に推挙される。もちろん彼はいいいや研修を受け、いいいや救急現場に駆けつける。

第1話ではトンネル内の高速バスの多重衝突事故現場での話。もたつく響を消防救援隊長が叱咤、しかしトラウマで震える彼には何もできない。それでも、はじめての判断を強いられたとき彼は神業のようなひらめきによって倒れている脳梗塞の2人の優先順位を正確に判定する。



このドラマの最終回(第11話)は奥多摩を震源とする直下型地震の救援の話だが、ここで響きは最愛の幼友達であり保護者である凜(りん)を失う。第2話では雑居ビル火災に巻き込まれた凜を他の男性の救出を優先することで見放してしまう話がある。(結果的に凜は消防救援隊長によって救われるのだが……)響の面前で、かつての妹の事件が再来するのだ。しかし生き残った凜は響をうらむこともなく自

分からDMA Tに志願してくる。この辺からこの女性の空虚な透明性が際立ってくる。

第11話ではこの件がもう一度繰り返される。奥多摩の診療所に春子の吸引具をとり帰った凜を土砂崩れが襲う。救援にやってきた響は愕然としてこれを救おうとするが、他にも赤タグの患者が多数いて結局涙を吞んで黒タグを付けて立ち去る。

この場面はDMA Tとして同僚の女性を救えず他の救える患者を優先させた、という意味では、正しかったのかも知れないが、職業的な正しさと、人間的な正しさは必ずしもマッチしない。凜はまるで響のマドンナのように自己犠牲的に「響は私の誇り」とつぶやいて息絶えていくが、それはやはり透明に空虚に響く。愛着はこのように清明なものではない。響は職業的な立場を降りて(制服を脱いで)、恋人の死を最後まで看取るべきだった。彼の優柔不断さは結局そのトラウマを癒すことがないであろう。

ドラマの結末は、データレコーダーで凜が奥多摩で採取した自然音を聞きながら春子が甦ってくる場面で終わっているが、この結末は凜の死と引き換えに春子を甦らせたという理不尽さで曇っている。

ついでに「**ヒポクラテスの誓い**」(Wikipedia より)を掲げておく。

医の神アポロン、アスクレーピオス、ヒギエイア、パナケイア、及び全ての神々よ。私自身の能力と判断に従って、この誓約を守ることを誓う。

- この医術を教えてくれた師を実の親のように敬い、自らの財産を分け与えて、必要ある時には助ける。
- 師の子孫を自身の兄弟のように見て、彼らが学ばんとすれば報酬なしにこの術を教える。
- 著作や講義その他あらゆる方法で、医術の知識を師や自らの息子、また、医の規則に則って誓約で結ばれている弟子達に分ち与え、それ以外の誰にも与えない。
- 自身の能力と判断に従って、患者に利すると思う治療法を選択し、害と知る治療法を決して選択しない。
- 依頼されても人を殺す薬を与えない。
- 同様に婦人を流産させる道具を与えない。
- 生涯を純粋と神聖を貫き、医術を行う。
- どんな家を訪れる時もその自由人と奴隷の相違を問わず、不正を犯すことなく、医術を行う。
- 医に関するか否かに関わらず、他人の生活についての秘密を遵守する。

この誓いを守り続ける限り、私は人生と医術とを享受し、全ての人から尊敬されるであろう！しかし、万が一、この誓いを破る時、私はその反対の運命を賜るだろう。

2014. 3. 23

(5)「明日、ママがいない」

1



2014年1月15日から始まった日本テレビのドラマ「明日、ママがいない」(脚本：野島伸司、松田沙也)は、グループホーム(地域小規模児童擁護施設)「コガモの家」の子どもたちの家族、里親への愛情と葛藤、その生活を描いたものであるが、第1回放送以来大変な問題となって、

全国に大論争を巻き起こした。

その理由はまず施設の描き方が、大変暗く不気味な上に、子どもたちは妙なあだ名でお互いを呼び合い、施設長は横暴な独裁者で、子どもたちを自分の意のままに、しかも差別的に扱っているように描かれているというものだった。

第1回は川島真希という女の子の母親が、痴情のもつれで自分の恋人を鈍器で殴り、傷害罪で逮捕されたので真希が「コガモの家」に預けられるシーンから始まる。そこにはポスト、ピア美、ボンビと呼び合う子どもたちが居り、左目に眼帯を掛けている17歳の女子高校生オツボネや料理担当の施設職員ロッカーなどもいた。オツボネの形相やロッカーの塊り肉を切る様子はいかにもおどろおどろしく、しかも「魔王」と呼ばれている施設長佐々木は右手にステッキを持って威嚇し、絶えず舌打ちをしながら丸いサングラスの奥から冷酷な目で子どもたちを眺め、彼らを手荒く扱った。たとえば、夕食は里親に気に入られるように芸の一つでもできねばならないと、上手に泣いたものから食べてもいいと「泣くこと」を強要したり「お前たちはペットショップの犬と同じだ」と言い放つ。初めてここに来た真希が「私は犬じゃない」と抵抗すると「じゃ、猫か」と追い詰めるといった具合だった。

この冒頭の内容に関して直ちに抗議の声があがった。まず全国で唯一の赤ちゃんポスト（理由があって赤ちゃんを育てられない親の赤ちゃんを匿名であっても一時的に預かる病院の窓口）を運営する熊本の慈恵病院からは、フィクションとしても許容範囲を超えており、子どもを「ポスト」などというあだ名で呼ばしているのは精神的虐待、人権侵害にあたる。また泣く事を強要したり、こどもたちをペット呼ばわりするのは誤解や偏見、差別を与えるとして、番組の中止、内容の再検討、施設の職員、こどもへの謝罪を求め、また放送人権委員会に審議を求めるよう申立書を送付した。更に同じような趣旨で全国児童擁護施設協議会も抗議し、表現を改めるよう要求した。



これに対して日テレ側はドラマは子どもたちの視点から愛情とは何かを描いたものであり今後も批判をに受け止め真摯な気持ちで描いていくつもりであり、最後までご覧いただきたいとして、放送を続行すると宣言した。

またスポンサー（KAO、日清食品、SUBARU、エバラ、小林製薬、三菱地所、ENEOS、キューピー）は第2話ではクレジットを降り、第3話では8社全社がコマーシャル自体を降りました。替わって日本放送機構J Aのコマーシャルが急遽入れられた。以後全国的な論争を巻き起こしていくことになる。

ドラマの中では各人がニックネームで呼ばれている。それを書き出してみると

<子どもたち>

ポスト（キララ）・・・赤ちゃんポストに入れられて父母を全く知らない。

ドンキ（川島真希）・・・母親が恋人を鈍器で散々に傷付け逮捕された。

【母が迎えに来てくれることを願っているが、母は再婚して真希を捨てた。
後日迎えに来るが、真希は里親の方を選ぶ。——事実の親より、真実の
親（魔王言）】

ピアミ（鳥羽直美）・・・もとはお嬢様育ちでピアノが得意だった。

本名、直美＋ピアノ＝・・・

【父親の経営する会社は倒産し、母は蒸発していなくなった。ピアノ全国
コンクール予選に別れを告げに密かにやって来た父にとりすがり、父
との同居を決める】

ボンビ（優衣子）・・・家庭が貧乏だったから。

【災害で両親ともを水にさらわれ、未だに遺体がわかっていない。そのため
いつまでも両親の死を受け入れることができない。アンジェリーナ・
ジョリーとブラッド・ピットの夫婦を「ジョリ・ピー」と呼び、憧れる】

パチ・・・パチンコ依存症の母親に放置され熱中症で死にかけた。

オツボネ・・・17歳の年増という意味。後1年で「児童」ではなくなる

<職員、その他>

魔王（佐々木友則）【施設長】・・・

施設の絶対的支配者。

【 エリート刑事だった頃
妊娠した妻が大出血を起こし、母体を保護するために
子どもを死産させた。しかし妻はそれを受け入れることが
できず、別居状態に。

それ以後魔王は刑事をやめ、自分の108の煩惱を晴らすため児童擁護施設
「コガモの家」を立ち上げ、108人の子どもを里親に引き取ってもらうこと
を自分の贖罪と考える。パチを里親に引き取ってもらうところで
106人までを達成する】

ロッカー【施設職員、調理員】・・・泣きがうるさいと、父親によってコインロッカ



一に放置されたことがある。

[少年の頃、妊娠している母親を殴ろうとする父親を逆に殴り倒し、殺したものと勘違いし、母親から一生黙っておくように言われ緘黙になった。実際には起き上がった父親を殺したのは母であった。母は身代わりとなって囚われたことになっている。]

アイスドール（水沢叶）[横浜児童相談所]・・・常に無表情で冷淡。

[小さい頃、両親と別れ、引き取られた里親のもとで冷遇されたトラウマを持つ]

ニックネームで呼ぶことに誤解や偏見を招くとの抗議があった。言葉は常に文脈（コンテキスト）の中で考えられるものである。同じ「バカ」といっても誰かが失敗を蔑んで「バカ」と言うのと、恋人に向かって優しく「バカ」というのとでは意味合いが全く違う。差別用語をマニュアル化して忌避するときに注意しなければならないのはこのコンテキストを考慮に入れず機械的に発語禁止にしてしまうことだ。人々はコンテキストを考える能力を失い、差別を無意識下に送り込み、相変わらず別の方法で差別するようになっていく。



確かに「ポスト」という言葉は両親から捨てられたかわいそうな子というイメージで相手をからかったり、蔑んだりするために使われたりするとしたなら、それは遺憾なことだ。その危険性は「ドンキ」にも「ボンビ」にもある。ただ、その使われ方を文脈的に考えようとする想像力を失わないようにして、そういう「用語」の是非を考えるようにしたいものだ。

3

さて、ドラマの中身だが、第1回目はおどろおどろしく描かれていたが、それはそういう効果を狙ったドラマの演出だったのだろう、ということが回を重ねるにつれて分かってくる。勿論大騒ぎになって、脚本家、演出家、プロデューサー等が相当演出、脚本内容に神経を配った結果なのであろうと推測される。



最初の数分間前出しのテイクがあって、タイトルシーンでは、手を握っていた片方の母親の手が左に引き込まれ消えていき、やがてまた子どもの手が現れて新しい親の手が両手で子どもの手を愛しく包むように現れてくる。別れた親、迎えに来る親というこのドラマの基本コン

セプトのイメージなのだろう。またエンディング・テーマでは「でも誰か私を誰か私を／そっと愛してはくれませんか」という非常に控えめなコトリノの「誰か私を」という歌が切れ切れにかかる。そういう意味では確かに非常に控えめで地味な内容を扱っているのだが、描写の手法は親子の愛情、子どもを持たない親の苦悩、施設の子どもたちの幸せになりたいための葛藤が、かなりドラマティックに描かれている。

そもそも「コガモの家」という児童養護施設を開いた佐々木（通称魔王）という男の個人的な生き方が主軸に据えられて物語が展開していくのだが、それは結構不可解なものである。元エリート刑事だった佐々木は生まれてくる男の子を楽しみにしていたのだが、妻の大出血のために子どもをあきらめて母体を救う決断をする。意識が目覚めてそのことを知った妻、香織は母体よりは子どもを助けて欲しかったという不可解な考えに固執し、夫の判断を許せない。そのことが原因で二人はやがて別居するようになり、佐々木は警察を辞めて児童養護施設を立ち上げる。それもちよっと不可解なのだが、自分の失った子どもの代わりに「親を失った子どもに新しい親を見つける（養子縁組）」しかも、煩悩の数と同じ108つの件数を成就するというものだった。多分それが贖罪なのであり、また道を外れようとするときに最後に踏みとどまらせてくれる最愛の人（親）を持つ意味だと考えたのだ。そういう意味では魔王はそうざらには、世間に居そうもないヒューマンな人物だということになる。

実際第7話では養子縁組が進みつつあるボンビを無責任に迎えに来た母親に対して魔王は泥の水溜りに土下座して「わたしはコウノトリです。もう1度子どもに選択のチャンスをあたえてくれまいか」と懇願する。（結局ボンビは大好きな養親を選ぶ——事実の親より真実の親）また、殴られる妊娠中の女性を庇って、ロッカーがそのDV夫を過度に殴りつけて警察沙汰になったとき、一部始終を見ていたボンビが一方的にロッカーの暴力のみを非難し、ロッカーの作る食事を拒否し始めたのを、自尊感情の欠如のために他者攻撃的防衛（他者を貶めて自分が優位に立とうとしている。）をしているのだと見抜き、その対策を始める。第9最終話では事故で失った自分の娘の死を受容できない母親に目を覚ませと迫って、この母親の娘になろうとしていたポストを連れ帰り、「お前は私の娘だ」と宣言する。

こういった果断に富んだ人物なのだが、108人を養子縁組に成功させ、やり直しを迫った魔王に対して妻は結局NOと言って去っていく。別居中に寂しさを紛らわすために別の男と暮らしていたことを自分に許せなかったのだ。このあたりも筋立てとしてはかなり無理があるが・・・というわけで魔王の愛情関係の話は結構無理筋が目立ってしまうが、



養子縁組のために「お試し」に行き一喜一憂する子どもたちの世界は、それなりに訴えてくるものがある。実親のエゴと



後悔、新親の期待とエゴ、職員たちの奔走と失敗。話は子どもたちの笑顔と涙にあふれ、第1回の無惨な放送失敗の予感を通り越して、なかなか見ごたえのあるドラマに仕上がった。

第1話の放送以来、大問題となったこの作品はスポンサーの降板などにも負けずに放送を続行、最終回を終わって日テレには視聴者の好意的な意見が78%くらい寄せられ、社長も安堵しているという記事が見られた（毎日新聞デジタル）。

年間400件くらいの養子縁組件数に対してアメリカなどでは年間5万件くらいあるそうだから、その辺でグループホーム、ファミリーホームに対する人々の見方もかなり違っているのかもしれない。いずれにせよこういった問題をタブー視することなく、家族の絆を考えていける風土があることが必要なのではないだろうか。

2014. 4. 2

（6） ドラマ評（4）「僕のいた時間」 ALS



ALSの青年の生き方、という重いテーマを扱いながらも内容はあまりに軽く、善意の人々ばかりの登場でALS患者の本当の苦しみや介護者の葛藤などは軽くすり抜けられていて障害を負った青年がラブストーリーを絡めてあくまで明るく生きていくといったことに終始していた。このドラマに関するブログなどでもその辺を描いていない軽さにリアリティがなく、奇麗事としてしか描かれていないという批判の方が多かった。

同じ大学の澤田拓人と本郷恵は商社の就職面接で知り合い海に遊びに行って3年後の自分に向けた手紙を書き空のボトルに詰めて砂浜に埋める。しかしこの恋は長続きしなかつ

た。卒業して拓人は家具販売会社に就職し、恵はファミレスでアルバイトしながら就活を続けるが、やがて介護のアルバイトをするようになる。その頃拓人の体に異変が起こる。ペットボトルの栓を捻ろうとする左手がうまく使えないのだ。やがてこの症状はひどくなり、大学の神経内科の谷本医師からALS＝筋萎縮性側索硬化症だと診断される。ALS（Amyotrophic Lateral Sclerosis）は全身の筋肉が次第に動かなくなり、話すこともむづかしく、自力で呼吸することもできなくなり、やがて死に至る進行性の難病だ。

このことを自覚して拓人は恵と別れることを決心する。その後、拓人の症状は次第に悪化し、職場では左脚の麻痺を自覚し、パソコンのマウスを動かして販売の広告を作ることぐらいしかできなくなる。そうとは知らない恵はもやもやしながらも大学の先輩繁之と付き合い始め、やがて結婚を約束するまでになる。

拓人が電動車椅子バスケットに夢中になっている頃、恵は介護施設の正式の介助員となり、その訪問看護をしていたALSの今井の勧めで彼の知り合いに近くのスポートセンターへ会いに行く。そこで恵はその知り合い＝拓人の車椅子の姿を発見して驚き、拓人が去っていった本当の理由を悟る。恵のこころは拓人へUターンして行き、二人の生涯へ向けての第一歩が始まる。

拓人はこうして生涯の伴侶を得るのだが、体の衰弱はごまかしようもない。やがて指が補助機を使わなければ筆記具を握れなくなり、医師の谷本からは人工呼吸器の装着を考えてみるように言われる。病気が進行すると呼吸筋が動かなくなり呼吸することができなくなるからだ。しかしこの人工呼吸器を付けるには気管切開をして、つけるためしゃべることはできなくなってしまう。しかも取り外すことはできない。この呼吸器をつければ3～4年、長ければ10年は延命が可能だ。

このドラマの中では今井が「人工呼吸器をつけないという（死に方ではなく）生き方をする」と宣言するが、そのことをメールで拓人に知らせたあと、しばらくして亡くなる。この今井に影響されて拓人も呼吸器は付けないとがんばるが、結局永く生きることを選択する。中学校で「僕の生きた時間」を講演した後、コンピューターに自分の声を録音し発生装置に記憶させてから、人工呼吸器を装着した。

それから3年後2人は結婚しているが、もはや拓人は発話するのに瞼の筋肉を使って発声装置からメッセージを伝えることしかできなくなっている。しかし二人は幸福そうに思い出の浜辺でひとときを過ごす。

メルヘン的な、あまりにメルヘン的な・・・

以上が簡単なあらすじだが、このALSの状態の次にTLSという状態がやってくる。TLSとはTotally Locked-in State（完全閉じ込め状態）の略で、もはや瞼さえ動かせず外界との交流が完全に断たれてしまう状態の事だ。要するに相互交流が完全に不可能になり患者は石のように涅槃状態に入るのだ。

ALSの母の介護をし、その後このTLSに陥った母をみごとに看取った川口有美子の有名な本「逝かない身体」から彼女の介護の決意と言おうか、介助することの極意（？）

を語った一文を挙げておこう。

想像には限界があった。だから母のために私に何かができるのだとしたら、それはありのままの母を認めて危害を及ぼすようなことは一切しないことだ。病人に不意打ち殺人をしかねない者が自分ならば、すぐにでも自分を遠ざけなければならないし、うつ症状が悪化している妹を病人から遠ざけることは喫緊にとるべき対策だとわかった。

ある神経内科医は、こういう患者は脳も機能しなくなっているからたとえ手足を切り取っても痛さを感じないだろうなどと言って患者から人格さえ奪おうとしたが、こういう説明をされることで患者から気持ちが離れてしまう家族が大勢いる。「死人同然」と言われれば、死ぬまで持てなくなってしまうのだ。でも脳の萎縮に関してはまったく別の解釈が可能で、それもしばらくすると学ぶ機会が与えられた。

(中略)

脳は人間の臓器のなかでもっとも重要で特別な臓器と思われているが、母は脳だけでなく心臓も胃腸も肝臓も膀胱も同じように萎縮させ、あらゆる動性を停滞させて植物化しようとしている。そして不思議なほどに体調の安定した生活が長く続いたのだが、これはよく解釈すれば、余計な思考や運動を止めて省エネルギーで安定した状態を保ち、長く生きていられるようにしていたということだろう。

そう考えると「閉じ込める」という言葉も患者の実態をうまく表現できていない。むしろ草木の精霊のごとく魂は軽やかに放たれて、私たちと共に存在することだけにその本能が集中しているというふうに考えることだってできるのだ。すると、美しい一輪のカサブランカになった母のイメージが私の脳裏に像を結ぶようになり、母の命は身体に留まりながらも、すでにあらゆる煩悩から自由になっていると信じられたのである。

このように考えていくと、私にはALSの別の姿が見えてきた。脳死とか植物状態と言われる人の幸福も認めないわけにはいかなくなってしまった。この時点での私の最大の関心事は、どちらの考え方を採用するかということだった。暗いほうか明るいほうか――。

ここからは簡単だった。患者を一方的に哀れむのをやめて、ただ一緒にいられることを尊び、その魂の器である身体を温室に見立てて、蘭の花を育てるように大事に守ればよいのである。そして自分は何をすればよいのか、行動することを前提に物事の整理をはじめた。こうなれば、すべての病いにまつわる物事の優先順位は単純に並べ直すことができた。母のような人たちの命を守るために、できることからひとつずつ始めることにした。

(川口有美子「逝かない身体」 第3章「発信から受信へ」2解放)

母に対しては「ありのままの母を認めて危害を及ぼすようなことは一切しないこと」と川口は考え、植物状態の患者を「死人同然」呼ばわりする医者には「病人に不意打ち殺人をしかねない者」と同じ水準でそれを遠ざけねばならないとする。

そしてT L Sの患者を「閉じ込める」(Locked-in)という言葉では表現できないものとして「むしろ草木の精霊のごとく魂は軽やかに放たれて、私たちと共に存在することだけ

にその本能が集中しているというふうに考えること」ができようし、そうすると「美しい一輪のカサブランカになった母のイメージが私の脳裏に像を結ぶようになり、母の命は身体に留まりながらも、すでにあらゆる煩悩から自由になっていると信じられた」。このことから「患者を一方的に哀れむのをやめて、ただ一緒にいられることを尊び、その魂の器である身体を温室に見立てて、蘭の花を育てるように大事に守ればよいのである。」という風に川口は考えることができるようになった。この境地こそ長年の悪戦苦闘の介護の中から得られた結論であったのだろう。

2014. 4. 30

(1) スポーツ観戦——ある日のフィギュアスケート

1

私はテレビや新聞でスポーツを見たり、結果を確認したりするが、まず現地に観戦に出かけるということはない。

最近「新生なでしこ」のアルガルベカップを見た。初戦、新人を大量に起用するという指揮上の過ちから、スウェーデンに破れ、泥沼の雨の中ドイツとやって当然のように破れた。5位決定戦に回り、やっと中国を押さえて5位になった。もともとアメリカには遠く及ばなかったチームが激戦を制して接戦で（PK戦で）ワールドカップを制したのが2年前であった。以後やはりアメリカとの技術的な差はいかんともしがたい。世界チャンピオンという胸のバッジだけではどうにもならないものがある。

WBC 2年連続優勝の侍ジャパンは今日（3月18日）、プエルトリコに敗れて決勝戦を逃がした。8回裏のチャンスをものにできずあさりと散った。WBCに積極的でないアメリカチームは早々に負けた。日本にはたとえばイチローとかダルヴィッシュとかいうスター選手はメジャーリーグの自軍に貢献することを優先してWBCに参加しなかった。それでも勝つはずだったのだが、いったいどうだったのだろうか。

昨日は女子フィギュアスケートをテレビで観戦した。男子フィギュアスケートの方は、羽生4位、高橋6位と惨敗した。丁度最後の締めくくりのシーンで羽生がポーズをとって崩れ落ちるシーンを目撃したのでどうしたことかと思っていた。2月下旬に左膝を痛めまだ回復していないからだでの出場だったようだ。2回の4回転のうち一回を完全に決め最後まで滑りきったが、まだまだ若い。精神的な起伏が大きすぎ、哲学がない。

女子フィギュアスケートの注目はキム・ヨナの復活だったろう。最初からSP首位のキム・ヨナが浅田とどの位の差でトップになるか、といった興味しかない世界選手権だった。結果はキム・ヨナ 218.31（S=69.97 F=148.34）の200点越えで圧勝した。3位の浅田は 196.47（S=66.86 F=131.03）合計点で20点以上離されてしまった。



2

自慢じゃないが、私は40になってからスケートを始めた。その頃京都伏見には何とアイスリンクがあった。しかしリンクは営業的に不振にあえいでいたので入場代を大幅割り

引いて客引きをやっていた。勿論伏見のスケートチームがまだあって、そういう選手達もリンクに練習に来ていた。私は転び転びながらも音楽に合わせて滑走することにすっかりのめりこんで年甲斐もなく夏の暑い日には割引券で遊びに行くことが多くなった。

前進で周回が出来るようになりそのうちバック滑走もかなりできるようになった。そうなってくるとトラック内でいろいろな滑り方を試してみるのもなかなか粋な遊び方であった。しかし残念なことに伏見リンクは私が通っていた1年後に閉鎖されることになった。行く当てもなくしょげていると高野にアリーナがあることがわかってそこで時々すべるようになった。ジャンプやスピンに挑戦することが次の目標だったが、それはなかなか困難なことだった。そのうち私は自分のスケート靴を買って練習するようになった。当時貸し靴代だけでも600円はした。しかも入場料も1000円位して1回行くにも結構費用がかかった。だからマイシューズを持つことは何となく本格的な世界に浸れてしかも安上がりになるというメリットがあった。で、技術のほうはどうだったのか、というと・・・。・・・だった。アイスホッケーのチームで練習に来ている人々はすごいブレーキをかけてあちこち方向転換することが出発点らしく派手な音を立てながら氷をザクッと削りながらあちこちに転換していく。彼らはアイススケートの技術を磨くというよりスピードとそのストップの快感に酔いしれてひたすら滑るのだった。私から見ていると違う人種だった。そのうち高野より近くにアイスリンクがあることを発見してそちらに通うようになった。醍醐スケートリンクである。ここには大きな駐車場があったので車で乗り付けて1時間半くらい汗を流して車の中、ミュージックで寛ぎながら帰るといった調子であった。このリンクでよく覚えているエピソードに「カモメのおじさん」のことだ。

そのおじさんは50歳前後の小柄な男で、ありふれた髪型でもっぱら周回しかしない。はじめて周回に同道するリンクの参加者は最初はリンクに慣れるために気にもしていないのだが、リンクになじんでくるにつれて、そのおじさんのことが段々気になってくるのだった。特に4、5人連れのグループ滑走者からは手摺に捕まって休んでいる時や、リンクからあがってベンチで休み水分補給をしている時などに互いに笑いを漏らしながらそのおじさんの方を指差すのである。私もつられて見てみるとそのおじさんは気持ちよさそうに滑っているのだが、まずイヤホーンをしてMDウォークマンを懐に入れ込んでいる。自分用のミュージックで滑っているのだ。そこまではいいのだが、その仕草がなんともおかしいのだ。それというのも大体、前進滑走の場合、両腕を肩の高さまで水平に上げてバランスをとりながら滑るものなのだがそのおじさんの場合両腕とも平たいV字型になっていてなにやら水泳の立ち泳ぎのような格好で前進していくのだ。しかもそれが自分の音楽にのって気持ちがいいのだろう、幾分陶醉気味に滑るのである。しかし傍からみているとその姿はカモメが飛んでいるような羽ばたき状に見えていて、滑走しているというよりリンクを泳いでいるように見えているのだ。自分ひとりの世界で、さも気持ちよさそうな滑稽なその姿に思わずかわいいというよりおじさんの一人よがり、と誰しも苦笑させられてしまうのだった。おじさんはそんな傍からの視線など、ものともせず自己陶醉の世界でプロス

ケーターみたいに周回を続ける……。まあスケートの楽しみ方はいろいろだから、こけてぶざまな姿をさらそうが、男女ペアなら女の子がこけてくれるほうが男はうれしいに違いないが、それにしても自分の姿に気づくことなく陶醉しているその有様は天国の苦いアイロニーを感じさせた。しかしこれもご愛嬌か。

いまひとつ記憶に残っているのが、加賀乙彦という作家の趣味がアイススケートで、その奮闘の有様がテレビで紹介されていたこと。私もジャンプやスピンを何回も試したことがあったか、コツを覚えれば何と言うこともなく出来るのに、そうでない時には結構難しいものなのだ。スピンなどは地上（床）でバレエのようにやってみると回転に必要なからだのねじり方やバランスの取り方が容易に会得されるのだが、それをいきなり氷上でやってみたところで、結構手間取ってしまうのだ。加賀乙彦はスピンができた。10回転くらいやっていたらどうか、まあそれでも60に近い人がそれをマスターしたということは賞賛に値するのだが、しかしその回転の姿がなんともおかしくて、今でも記憶に残っている。優雅に回転しているというのではなく、まるで金太郎飴の棒状のものがしかたなく、くるくると遠心力でまわっているというか、回らされているという様相だったのだ。おそらく目が回って、からだはこちこちのまま停止に至っていたに違いない。その状態ではスピンは単独では可能だけれども前後の技にスムーズに入れないのだ。私がこんなことを言うのは生意気かもしれないが、たぶん当たっているに違いない。何度も言うが、まあスケートの楽しみ方は種々あっていいわけだから、それでいいといえればいいのだ。ただ何となく単独競技、単独の審美的なスポーツというものはやはりくすぐったい視線を誘発するものらしい。相互批判や競争でいささか切磋琢磨し、ある程度のところで悠々と遊べるようになるのが理想のように思う。

2013.3.22

（２）アルガルベカップ

1



algarve とはアラビア語で「西」の意。ポルトガル南端のかつてのムーア人王国の地。(ムーア人とは、8世紀ころはイベリア半島を征服したイスラム教徒を指していた)

この地で1994年以来、毎年ナショナルチームによる国際大会が開かれてきた。ワールドカップ、オリンピックに次ぐ大会で、やはりアメリカが20回中9回の優勝回数を誇っている。(その他、ノルウェー、スウェーデン、中国、ドイツなど)日本は2011年から参戦し、3位、2位という成績である。優勝経験はない。それゆえ2014年大会では優勝への意欲は高い。

実際アメリカとは引き分けたが、デンマーク、スウェーデンを破り、ドイツとの決勝戦を3月12日に残すのみとなった。

初戦アメリカとは不用意なキーパーのゴールキックを直接はじき返されるような、OWNゴールじみた跳ね返りで1点を決められ、後半宮間のフリーキックのゴールで追いついた。この初戦を落としていたらひょっとするとスウェーデンが決勝に残ったかもしれない。

2回戦デンマークとは、岩淵が前半ドリブルでゴールに迫りはなったシュートは水平バーを叩きそのまま真下に叩きつけられるように落下し、ネットに吸い込まれて行った。この1点を守りきって勝利。

3回戦スウェーデンとは前半ゴール間際のフリーキックをヘディングで決められ、1点ビハインドで迎えた後半早々、大儀見のゴール前のボール奪取からドリブルシュートであっさりと追いつき、終了間際ペナルティキックを得て宮間の左シュートがキーパーの手にはじかれながらもネットに吸い込まれていった。この試合は常に日本が指導権を握った、優位な戦いだったし、パスもよくつながり、見ていてどこかでやってくれるという期待を持たせてくれるような充実ぶりだった。

一般に会場はまばらな観客しかいないどこかの田舎でやっている草サッカーという印象で、のんびりしてはいるが、まるで国際大会といった雰囲気ではない。まあ男子サッカーのように何万人が会場を埋め尽くす試合といった加熱した有様の方が異常なのかもしれない。それにしても12日の宿敵ドイツとの対戦が楽しみだ。

というわけで、決勝戦はすぐやってきた。

決勝会場もやはりまばらな観客の中での対戦だった。焼け付く太陽、真昼のファロ、エスタジオアルガルベ。

前半は0－0の引き分けだったが、後半は開始1分後にいきなり失点。その後5分後15分後にそれぞれ1点決められ、後半開始早々3点もの差をつけられて追いかける苦しい展開となった。しかもこの失点のうち2本は攻め込まれて攻撃優位の体制の中からミドルシュートを決められるというはなはだオーソドックスな方法で決められて



しまっている。それほどドイツの反撃のスピードは速く、力強かった。日本の攻撃にはゴール前でのそういった速さと力を感じさせる場面が殆どなく、相手の圧倒的なディフェンスにたやすく阻止されてしまう展開であった。力の差を感じさせる<完敗>という表現がぴったりくる試合だった。3点取られてからはチャンネルを換えてミュンヘンの旅行番組で豚の丸焼きやいぶし豚とハニーワインの豪華ダイナーなどを見て、テレビを切ってしまった。

全く自分は勝利する試合しか見たくないのか、情けなくも寂しい男なのだと気づいたが、いかんともし難く、この観戦記もいささか景気の悪いウェットなものになってしまったが、結局勝負は優越感への相乗りが基本だから美談を挟んで全体にふっくらと終わることがなかなかできないものだと気づいたりもする。

全試合の結果は以下の通り。

1位	ドイツ	7位	アメリカ
2位	日本	8位	北朝鮮
3位	アイスランド	9位	ロシア
4位	スウェーデン	10位	ノルウェー
5位	中国	11位	オーストリア
6位	デンマーク	12位	ポルトガル

2014. 3. 13

(3) Sochi 五輪——金メダルの喧騒

——パリの散歩道

1

ソチ、フィギュアスケート決勝フリーで羽生は2回転倒したが、カナダのパトリック・チャンに5点差で勝った。パトリック・チャンも2回手を突き、ジャンプの回転が抜けるなどして全体に精彩を欠き、結局2位にとどまった。

人間の限界に挑んでいるのか、あるいは仕方なく極限值という差異を微分する争いを繰り広げているのか、よくわからない。体操競技でもそうだが、およそ人間ができそうもないことに挑戦して差別化をはかるというのが現状だ。

古い話になるが1964年の東京オリンピックでのチャスラフスカ、1976年のモントリオールオリンピックのコマネチを較べてみるともはや体操はクールな機械へ



の人間の馴致としか思えないほど変化した。一人は東欧革命に翻弄された反体制派の重鎮で弾圧されて大変な苦勞をした。同じくもう一人はチャウシェスク大統領の息子に翻弄され、東欧革命の波に飲み込まれて亡命した。世界的な栄光を背負いながらもそれゆえにそのたどった道は2人とも劇的でしかも厳粛にならざるを得ない悲慘さを抱えていた。それは決して研ぎ澄まされた刀の鋭い切抜き線を描いたわけではなかった。

体操の世界ではその技の難度でどうしようもない失敗を犯すことを選手も観客も知っている。フィギュアスケートに至っては4回転ジャンプという人間の体力や敏捷性にほとんど限界線を引くような技術を要求される業を何回か入れることを勝つために強いられるや、そればかりがスケーティングの本命であるかのように錯覚される。その結果全体の統一よりも技の難度が選択され、氷上の悲喜劇が起こってしまうのだ。今回のフリー決勝戦でも誰かが優れていたというより、誰が失敗が少なかったかが中心となって、判定が行われ、結果的に羽生が優勝した。これはフィギュアスケートにとって果たしてよいことなのだろうか？

スポーツは本来勝利（＝善）、敗退（＝悪）の図式で戦われていくが、もともとはこうした善悪二元論の彼岸で戦われるべきものではなかったのか。勝利だけがクローズアップされ、その影で友好が隠されているようではスポーツの意義はない。

宮城県民は羽生を宮城の誇りといい、一国の首相が直接電話で本人に快挙を祝う電話をした。靖国神社参拝問題などで東アジア外交で孤立し、NHKの榑井会長、の従軍慰安婦失言問題、などで揺さぶられている日本は国際社会でよっぽど認められたいらしく、初めての金メダルにこれほどの大騒動をするのだ。それほど国際社会の中で自信を失っているのが今の日本の姿らしい。アメリカに認められ、その庇護を受けるべく、いちいち大統領、

国務長官、外交代表、アメリカ大使の顔色を伺い、何とか賞賛とねぎらいを受けようと画策する。しかし、中身の無いものにねぎらいの言葉も何もあったものではない。それでは、日本の独自軍事再武装か？秘密保護法、集団的自衛権、9条の改正とその準備は着々と前に進められている。日本がアジアで信頼を受け、アメリカをもうならせる外交をやれる日はいつになったらやってくるのか。自信のなさや五輪における国際社会での壮挙という形で、友好より勝利を誇らしげに掲げるだけの軽薄さによって彩られており、そうして自分の姿を映す鏡を失っている日本人には今いったい自己像を本当に誇らしげに語れる真の友を、同士のどこに見出しようと言うのだろうか！

2

羽生がSPに使ったゲイリー・ムーアの「パリの散歩道」 Parisienne Walkways は1978年に発売した「バック・オン・ザ・ストリート」の中のライノットとの共作で、UKシングルチャート8位を記録した。歌詞は以下の通り。



『パリの散歩道』

49年のパリを思い出す
シャンゼリゼ大通り
サンミッシェル通り ポージョレーの味
おまえと ずっといしよだった
あのパリの日々

古い写真を見ると思い出す
コンコルド広場で過ごした夏の日々
いくらでも 書き続けることができる
パリの日々の思い出

I remember Paris in '49
The Camps d'Elysses
Saint Michel and old Beaujeaulais
And I recall that you were mine
In those Parisienne day

Lookin' back at the photographs
Those summer days spent outside concordes
Oh I could write you paragraphs
About my old Parisienne days

内容は他愛のないもので、大戦後のパリの女との思い出の日々を歌っている。しかし楽曲は実に渋いブルースロックだ。それは思い出の苦い味が切り裂き畳み掛けてくるもので

ノイジーで歪んだギターがそのほろ苦さを極端なまで引っ張って行き「泣きのギター」といわれたゲイリー・ムーアの本領が発揮されている。

とてもじゃないがこのほろ苦さは10代の少年には表現しきれないものだったろう。

2014. 2. 18

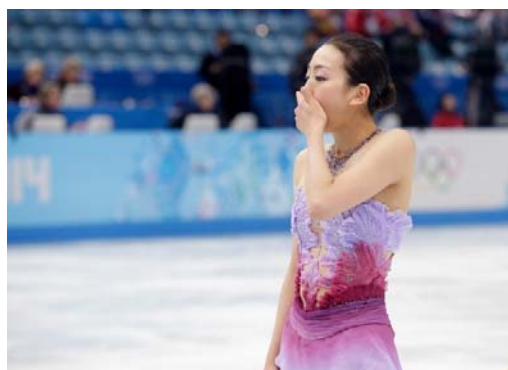
(4) Soochi 五輪余話

—— 浅田真央、最後の舞

ソチも終わりになって、またいろいろな波乱やナンヤがあった。

そのひとつはフィギュアスケートの日本女子の不振、浅田真央の挫折だった。

しかしいまやもう浅田の完璧に近かったフリーの演技によって、しかしこの挫折は逆に物語となり、栄光へと高められた。SP 16位という無惨な出だしから6種類8つのトリプルジャンプをほぼ完璧に跳んだその姿は、ファンや多くのアスリート達の共感と賞賛を誘った。プルシェンコは自分のツイッターに「真央は真の戦士」と賞賛を送った。それは最初の真央にしかできないトリプルアクセル（三回転半）に挑戦し、成功させたことに対してであった。以前にバンクーバー・オリンピックだったか、プルシェンコは4回転ジャンプで成功したにもかかわらず、SPで3回転しか跳ばない安全策に出たライサチェックに総合点で敗れたことがあった。高橋大輔も4回転に失敗し、インタビューではやはり4回転に挑戦していきたいと語ると、プルシェンコが「同士よ」と声を掛けた。



バンクーバー時代の浅田のコーチであったタラソワは解説後どっと泣き崩れた。カナダのエルビス・ストイコは「私にとって今夜の主演は浅田真央だ」と記した。こうしてひとつの伝説（レジェンド）が生まれたのだ。

SPではほとんど浅田にとってありえないような失敗が続いた。キム・ヨナの好調、一つ前のロシアのソトニコワの圧倒的な演技と観衆の声援とどよめき、最後の滑走順が彼女の緊張にひびを切り込み、集中力をばらばらにしてしまった。最初のトリプルアクセルの失敗で浅田は分解してしまったのだ。演技後「今は何もわからない」を繰り返し、虚脱したまま「わからない」と同じことを繰り返す佐藤コーチがいた。

この件で次期オリンピック・パラリンピック組織委員会会長森喜朗元首相がつまらぬことを言った。「あの子、大事なときには必ず転ぶんですよね。団体戦、負けるとわかっている団体戦に何も浅田さんを出して、恥かかせることなかったと思うんですよね」

「大事でないとき」に転んでいてはもはや、アスリートとはいえないだろう。「大事なとき」だから、それがわかっているからこそ限界線をコントロールできず失敗してしまうのだ。この心理状態はアスリートにはつきものの魔物なのだ。後半の発言は団体に出さずに個人選に集中させるべきだったと好意的にみれば、言えなくもないが・・・前半の発言を聞いて舐添都知事は苦笑いをしながら、「ちょっと困った発言だ、機会があれば進言したい。」とコメントを残して視察のためにソチへ旅立った。

フリーを終えて、ロシアのソトニコワがリプニツカヤ、キムヨナを押さえて優勝した。このキムヨナの判定に対して韓国のジャーナリズムからブーイングが起こった。ただ、ソトニコワの計画プログラムの総点がヨナより大きいプログラムだったとされている。ヨナの演技は確かにほとんど完璧に完成されミスもなかったが、なんとなく新しい時代への意欲、エネルギーを感じさせるものではなかった。その点でも評価はソトニコワの新しさ、エネルギー的な演技に傾いた。

こうしてソチ女子フィギュアは新星とレジェンドを生んだのだ。

2014. 2. 22

(5) 遠 藤



20日、遠藤が松鳳山を破った日、琴欧州が引退を表明した。ブルガリア出身の力士で大関までになったが、昨年来連敗を止められず関脇に陥落。この春場所で白鵬との対戦を最後とした。白鵬との最後の対戦を「幸せでした」と語った。

モンゴル出身の力士は多いが、ブルガリア出身の力士は珍しい。以前私はそのブルガリアの聖ソフィア学院からやってきた交換留学生の美少女マリアの日本語指導をしていたことがあって、日本滞在の欧米の高校生の大阪での交流会に連れて行ったことがあった。その帰りのJRの車内で「先生、楽しかった？」と聞かれたことがあった。日本語がぺらぺらで本来なら私のほうが言わねばならないことを逆に気を遣って言ってくれる彼女になんて優しい子なんだろうと感心したことがある。ブルガリアのイメージといえば一般にすぐ「ブルガリアヨーグルト」と返ってくるが、同時に広い野原に広がる無数の薔薇のイメージも思い浮かぶ。彼女が東京に行ったとき琴欧州に会えたらいいのになと言い出せなかったが、ひそかに思ったりしたことだった。

一方遠藤は昨年の好成績の結果、今年から十両から平幕に昇進し、前頭として活躍を始

めた。鬘はまだ結えないが、ざんぎり頭で若々しい相撲をとるその人気は抜群である。

春場所では何と最初の3日間、鶴竜、日馬富士、白鵬と12日目に至っていずれも優勝候補の3人と、立て続けに当たったのだからたまったものではない。立て続けに負けはしたが、その相撲の初々しさに場内大歓声であった。5日目稀勢里戦で熱戦初めて白星を勝ち取る。このとき顔側面、前面に傷を受け、以後毎回金太郎さんよろしきその顔でまたまた格を上げた。現在6勝6敗で勝ち越すにはあと残りの3回戦のうち2勝しなければならない。

それにしても12日目の松鳳山との長い対戦は圧巻であった。引いたり、押したり回ったり、何度か負けそうになりながらも、はらはらする観客を尻目にとうとう最後には相手を押し出して寄り切った。

八百長試合などの汚名に長く沈んできた国技、相撲にもようやく若々しい春が来ようとしているのだろう。

2014. 3. 21

<付記> 翌日から千秋楽まで遠藤は3連敗し、負け越した。同じく白鵬も琴奨菊に破れてから3連敗し、優勝を鶴竜に譲った。勝負の世界では何事がおこるかわからん。話は飛ぶが、21日、囲碁の世界では棋聖戦で仙台出身の16歳の高校生一力遼四段が張栩九段を破って史上最年少の棋聖戦リーグ入りを果たした。これまでは井山裕太碁聖が17歳で最年少だったが・・・後進恐るべし。

棋界の異変、そして角界の異変。やはり新しい春がやって来ているのだ。

(1) 希望のシンフォニー ——佐村河内守「第一交響曲」について

4月の民放のテレビで初めてこの曲の存在を知った。
2003年に作曲されていたこの曲は2008年に広島で初演され、その後2010年に大友直人指揮、東京フィルで第三楽章が演奏され、同年秋山和慶指揮、京響が全曲（全3楽章）演奏を行った。テレビでの紹介によってこの曲のCDは驚異的に売れ始め現在5月で16万枚を越えている。

被爆二世、全聾の作曲家ということでベートーヴェンに類比され語られる。本人は今49歳だが、その生涯は波乱万丈、想像を絶するものである。本来ロマン派、後期ロマン派の交響曲を作りたいと少年の頃から志し、現代音楽しか教えない音楽学校に進学することを拒否、独学で作曲法を学び、旋律を書きとめ、ロック歌手を目指したこともあったが、ゲーム音楽などに応募1999年「鬼武者」のオーディションでは優勝した。しかし丁度その時、聴覚を完全に失った。耳鳴りの轟音と眩暈の連続に何度も自殺を試みたが、生還。2008年に交響曲の初演のチャンスをつかみ、以後脚光を浴びるようになる。

私も早速CDを買ってきて一様全曲80分を聞いた。その中でも優れていると思った楽章はやはり希望への讃歌で閉じられる第三楽章であろう。ただ、マーラーのようなとりとめもないメロディーの再現と爆発・沈滞・崩壊を何度か繰り返しながら最後にたどりつくというパターンは全楽章同じだ。第三楽章では全体がマーラー的だし、スケルツォ風なところはショスタコビッチに、甘美な旋律はベートーベン、マーラーのアダージョに、爆発的なところはブルックナーに似ている。

東北では「希望のシンフォニー」といわれているように最後の楽章は暗鬱で破滅的な闇夜からの生還、希望を告げ知らせる鐘の高らかな響きの中に光が溢れて静かな命への讃歌を聴くことが出来る。

2013.5.1

(2) 希望のシンフォニーから アイロニーのシンフォニーへ

佐村河内守が作曲したとされ、CD売り上げが18万枚にも及んだという「交響曲第一番HIROSHIMA」が実は、桐朋学園大学の講師新垣隆によって作曲されたものであることが最近のマスコミによって暴露された。



この曲ばかりかゲーム音楽「鬼武者」、高橋大輔がソチ五輪ショートプログラムで滑る「ヴァイオリンのためのソナチネ」も含めて1996年からの18年間の佐村河内守の曲の殆どを新垣隆が代作したことになる。

昨日（2月5日）から、新聞・テレビで大騒ぎになっているが、本日発売の「週間文春」にノンフィクション作家神山典士＋取材班名で「全聾の作曲家はペテン師だった！」のタイトルで詳しく報道されている。

この曲は2008年に広島で初演され、広島市民賞を受賞しているし、2011年以降は東北でも「希望のシンフォニー」として親しまれてきた。私も昨年4月の中居司会の「金スマ」でこの作曲家の特集に興味を持ちCDを聞いて、その評をネットに公表したことがある。映像的には昨年3月31日放送されたNHKの「魂の旋律～音を失った作曲家」として全聾の、ベートーヴェンにも比肩すべき人物として描かれ紹介されたのがまとまったものとしては最初であったろう。その後さらに有名になり、「ヴァイオリンのためのソナチネ」は、とうとう世界のスポーツの晴れ舞台で使われるほどにもなる矢先、さすがに本来の作曲者の新垣が真相を明らかにすべきだと決意するに至った。すでに2001年にはアメリカの「TIME」誌に「現代のベートーヴェン」として紹介され、逆に昨日5日イギリスBBC放送は「日本の『ベートーヴェン』が不正行為を認めた」と驚きをもって伝えた。



最初から共作としておけば問題もなかったのにと、曲としてはよい作品なのだからという曲自体を惜しむ声も聞こえる。しかし真実を伏せ話題づくりが先行し、その伝説性が売り物として大きく寄与した意味ではその詐欺性に憤慨する人は多い。作品としてのCD、出版本は絶版とされ、公演予定のコンサートはすべて中止された。

ベートーヴェンの「運命」だって、音楽家にとって致命傷の聾に絶望し、自殺寸前にまで追い詰められた本人が「運命はかく扉を叩く、ジャジャジャジャ〜ン」と言ったという伝説性でいっそう有名になったのだから、芸術と伝説は切っても切り離せないものだが、能力的にはさしたるものを持たないプロデューサーが、伝説性を巧みに演出し、代役（影武者）をうまく操っていたというのではサマにならないだろう。

曲そのものについては前回コメントした。不完全燃焼のある作品で、しかし状況にうまくコミットできていたし、作品として（もちろんベートーヴェンに比肩しようもないが）駄作というわけではないので、本来の作曲者の名前を冠して遺産としたらよいのではないかと思う。

2014. 2. 6

(3) おぼかたさん 1

時にわれわれを不安がらせるもの・・・それは、少女誘拐である。それは匿名の暴力的欲望の影をひきずっているから。

時にわれわれを喜ばせるもの・・・それは48人もの大勢の喧騒を集めた聖歌隊ではなく、少女っぽくて、かつおばさんぽい先遣隊である。

「おぼかたさん」という舌をかみそうな名前のニュアンスもさることながら、ムーミンとライトピンクの壁に囲まれた割烹着のさざえさんのような「少女」が世界の大科学者の大向こうをうならせたという最近の「事件」に実に爽快なものを感じさせられた。とくに5年前の「ネイチャー」誌への論文投稿に対して「生物学の世界を愚弄するもの」という一フェローの彼女を愚弄したコメントに打ちちゃりを食らわした壮挙の世界的公認に思わず「幸せ」を感じたのだ。ネイションの存立基盤はその大義名分への同一化に本義がある



のではなく、ラカンの「享樂」にある、というS・ジジェクの考えが本当だとするならば、私はこのネーション（日本）に住んでいることにおもわず享樂！快感！と叫びたくなるような衝動を感じていた。それはよく言われるスポーツ選手が国際大会において「日の丸」を背負ったり「誇り」を抱いたり、といった悲壮感にあふれるものではなく、ただ単純に存在していることの快感をなにげなく打ち込まれる・・・という経験なのだ。

この少女は割烹着を着ていながらその下には若者に人気のブランドのスーツを羽織っているという。まったく宇宙戦闘アニメの無邪気な戦士と同じだ。

STAP細胞は、山中伸弥が作ったiPS細胞と違ってその製法が簡単であること、ガンになる可能性が低いこと、胎盤の再生にも使えることなど、未来に向かって大きな可能性を引き出した発見だった。まだねずみにしか実験が及んでいないが、(ハーバードですでに猿の実験や人体の実験にまで及んでいるという) やがては人間の再生医療にその道を開くにちがいない。彼女は「若返りもありうるかも・・・」といたずらっぽく付け加えたが、その彼女はまだ30歳の才媛なのだ。

リサちゃんやあまちゃんじゃないけれど落ち込んでいる日本を救うのはひょっとして若い女性なのかもしれない。・・・そういえば「永遠に女性的なるものが私を救う」といいながらグレートヒエンと昇天して行ったのは若返るためメフィストフェレスに魂を売ったファウストだったが。

2014. 1. 31

(4) おぼかたさん (2)



1月にネイチャー誌に掲載され、簡単につくれる万能細胞として世界を驚かせたS T A P細胞が、いまや消滅の危機に瀕している。

主な疑義は以下の通り。

- 1、世界各地で論文を基に細胞を作ろうとしても作れない
- 2、さまざまな細胞に変化したことを示す画像が骨髓

の細胞から変化したことを示す小保方氏の博士論文に酷似している。

3、実験方法を説明する文章で、ドイツの研究者のものと同一の記述がある。

こういう批判が寄せられ、共同研究者であった山梨大学の若山教授が3月10日に共著者に論文をいったん取り下げることを呼びかけた。

これに対して、共著者の理化学研究所のプロジェクトリーダーの丹羽は「S T A P細胞ができたという根幹は揺るがない」とし、同じく共著者のアメリカ・ハーバード大学のバカンティ教授も同様の趣旨の声明を発表した。

しかし、理化学研究所は14日に調査結果を公表し、ノーベル化学賞受賞者の野依理事長は「ずさんで未熟な論文」で重大な過誤があった事を認めた。一方で石井委員長はS T A P細胞の存在については再現の可否を待つしかないとした。

以上がS T A P細胞騒動の概略である。

小保方氏は近いうちに公式な会見を行うことや、ネイチャー紙の論文取り下げの検討、早稲田大学の博士論文の取り下げなどを表明している。

少し前の話になるが、2005年にソウル大学の黄禹錫教授の人クローンE S細胞が「世界初の作製」と宣伝されていたながら論文捏造であったことが発覚し、韓国の生命科学研究に対する国際的信用が失われた事件があった。

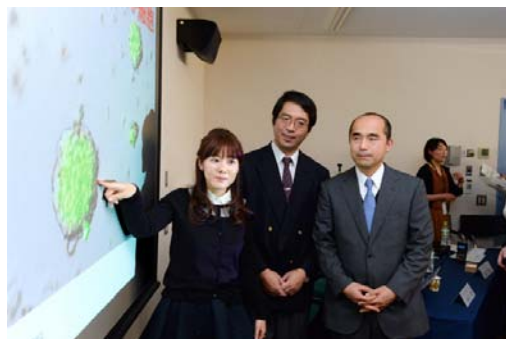
京大のi P S研特定準教授の八代嘉美は、今回の件を大きなダメージを与えた傷ましい事件としながらも、まちがいをインターネットのようなソーシャルメディアによって指摘され、高度な専門性の壁を破ったことにひとつの意義を認め、また研究者の職業規範、職業倫理の再認識、社会とのつながりを求めた情報発信、それらによる信頼回復が重要であると訴えた。

ただ、理研の研究所としてのありかたそのものにも問題があったようだ。政府から数十億の補助を受けている理研の新任の研究者たちは年収300万円程度の期限付きの雇用者でその期間に何らかの功績を出さないと雇用は継続されない。そのため雇われてから少な

くとも2年以内には花火（功績）を打ち上げろと、せかされるらしい。かててくわえてS T A P細胞の研究が入る前には京大のi P S細胞が世界の脚光を浴び、ノーベル賞まで山中氏が受賞して政府の援助は完全に京大の方にまわり、理研は置いていかれた。そういう意味では生理科学の分野で理研における研究の挽回が急がれており、小保方さんはその期待の星として迎え入れられた。こうしてやや拙速な結果が、十分な検討を経ることなくネイチャー誌へ流れて行ったのだ。

ちなみにアメリカの「サイエンス」誌の記者が実験のために10分読めばそのでたらめ振りが分かる科学論文を世界の100社程度の科学雑誌に送ったところ、そのうち60%がその論文を採用したという。そのくらいのいい加減さも掲載誌にはあるということだ。

「おぼちゃん何したん？」と関西弁で言ってみたくなるが、その後丹羽研究員は再現にトライし始め、ハーバードのバカンティ教授の研究室のホームページには新たな作成方法が公開された。また東北大の大隈典子はクローン蛙からクローンマウス誕生まで40年もかかり、その間クローンマウスは捏造だったとみなされた経過に触れている。（京都新聞「土曜評論」2014. 3. 22朝）



何とそのクローンマウスを1998年に世界で始めて再現したのが今回小保方論文を取り下げるように勧告した山梨大学の若山教授だった。

そういうわけで追試再現には長い時間がかかる。にしても再現にかかわる疑惑が次々に出てきている以上、小保方さん自身がすべてを公表することが、とりあえず今回の問題の第一歩となることは言うまでもないだろう。前回の私の評論「おぼかたさん」は少々浮かれすぎてしまった。今後も続編を書かねばならないのではないかと思うが、「ほんもの」であることの難しさ、「ほんもの」は何度試しても新しいというありがたさを考えさせられた2014年の初頭であった。

2014. 3. 26

（５）おぼかたさん（３）

1



4月1日、理研は調査委員会の最終報告書を出した。3月14日の中間報告からわずか2週間での結論は政府の進める

「特定国立研究開発法人」(仮称) への指定が今国会法案策定の6月までという期限があり、これに間に合わせるためには4月初旬最終報告でなければ間にあわないという政治的スケジュールに合わせたものだ。そのため報告は拙速をまぬかれない点がいくつも見られる。

「特定国立研究開発法人」は、世界水準の人材を高い報酬で雇い、長期の研究プロジェクトを計画するものだが、理研がその候補に挙がっていたものだから今回の失態を何とか切り抜けねばならないという至上命令が下って結論を急いだのだろう。

その報告によれば

① 「ネイチャー」の論文には

STAP 細胞が体のさまざまな細胞に変化することを示す画像が小保方さんの博士論文から流用されていた＝[捏造]

② DNA を分離する電気泳動の画像が別の画像の切り貼りであった＝[改ざん、不正]

この2点において捏造、改ざんであると断定した。またその責任については

③ 研究不正は小保方さんひとりにある。

④ 論文共著者(笹井副センター長、若山山梨大学教授)に研究不正はないが、不正を招いた責任は重大。

とした。このように小保方さんひとりに責任を負わせ断罪しようとするに関して小保方さんは「自分の行為には不正の目的も悪意もなく、驚きと怒りの気持ちでいっぱい、どうも承服できない」とコメントを寄せた。

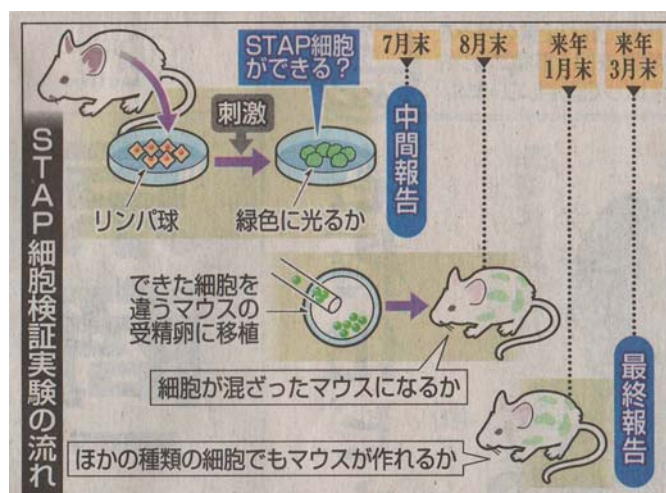
4月7日には、理研の検証チームのプロジェクトリーダー丹羽仁司は理研が6人のチーム(小保方、笹井は含まない)で1年間掛けて検証作業を行うことを公表した。7月に中間報告を行い来年3月に最終報告を行う。その実験の要点は

- ① 既に分化を終えて万能性を失った細胞を万能性を持つ STAP 細胞に作り変えることは可能か。(STAP 細胞論文の核心)
- ② 生後1週間のマウスの脾臓のリンパ球を使用。このリンパ球に刺激を与えて万能細胞を作る。万能細胞には特有の DNA 配列の遺伝子があり、この遺伝子が働くと緑に光るような仕掛けを作っておいてその有無を見つける。(使ったマウスのリンパ球から出来上がった万能細胞であることを確認)
- ③ できた(万能)細胞を違うマウスの受精卵に移植、その生まれてきた子ども(キメラマウス)に最初の材料にしたリンパ球と同じ DNA 配列の細胞があれば万能細胞が混ざっていることになる。(由来の検証)

- ④ 更にキメラマウスと母マウスとをつなぐ胎盤にリンパ球の細胞と同じものがあるか調べる。他の万能細胞（ES 細胞）では胎盤の一部にはなれないのでこの発見があれば STAP 細胞が胎盤の一部になったことが証明される。（胎盤での検証）
- ⑤ STAP 幹細胞でも同様の確認作業をおこなう。

というようなちょっと難しい検証作業があるようだ。（掲示図：京都新聞 4 月 8 日朝刊）

それはともかく、小保方さんは 8 日に不服申し立てを行い、9 日に記者会見を行うという。



2

というわけで、4 月 8 日には小保方さん側から理研に対して「不服申し立て書」が提出され、9 日には大阪のホテルで小保方さんの 2 時間 30 分にわたる記者会見が行われた。

不服申し立て書では不正とされた改ざん、捏造画像について不正ではないという主張がなされた。

また 9 日の**記者会見**では同様に画像は故意、悪意によってではなく、過失によってな



れたものであるという趣旨を中心に「不正ではない」という弁解と謝罪が行われた。また STAP 細胞の実在、他の成功者の存在、小保方流のレシピ、また 2 冊に限定されない 4～5 冊の実験ノート

の存在などが示唆されたが、当日には詳しく説明はされなかった。そして将来への希望としては構成員を変えた再調査を行い、妥当な結論を出して欲しいこと、また STAP 細胞の未来をかけた研究生活に戻って欲しいという希望を述べた。

小保方さん側の説明によって理研側の説明とは異なった感触が提示されたが、画像がただの過失であったかどうかの判断にかかわる証拠のようなものが出されたわけではない。ただ捏造に関しては STAP 細胞の存在を確信している小保方さんにしてみれば、捏造する

必要性などはまるでなかったわけだから、単なる取り違えという公算が大きい。

また理研はその後、調査委員会の構成メンバーを変えずに検討の調査委員会をやりと発表した。

来週（14日～19日）には再調査に関する理研の方針が（するかしないか）提案されるし、指導に直接当たっていた副センター長の笹井も謝罪会見を開く予定である。

というわけでこの問題のクライマックスが到来し、終わったわけだが、いったい事態はどうなっていくのだろうか？

結局、理研が特定国立研究開発法人への指定を受けたいという政治的な日程にせかされて150日ルール（不正の調査に関しては、150日以内に審査結果を公表する）のわずか1／3（1ヶ月半）で最終報告書を出し、その間テレビ電話での聞き取りと実際に会って話をしたのはたった1回、実験ノートも一部しか受け取っていないという杜撰なやり方で「聞き取り等は十分だったと自負している」（石井調査委員長）というのにはあつけにとられる。理研の業績至上主義、不要なものは冷酷に切り捨てるという間違った組織的体質がまず問題にされなければならない。

錬金術は夢のようなもの空想的なものであったかも知れないが、それはそれなりに科学の歴史に意義を残したのだ。荒唐無稽な夢であっても挑戦し続けることが大切だ。そういう風にして人は空を飛ぶようになったし、月世界に降り立つようになった。またほぼ同時に世界の出来事を知り、直通で部屋と部屋、個人と個人をネット、声で自由に結ぶことができるようになった。

おぼかたさんの夢は終わらないだろう。小林やすのりのように「わしは小保方さんに騙されてるのだろうか？」などと、うろたえる必要はないのだ。

2014. 4. 11

日仏共同シンポジウム

Colloque philosophique franco-japonais について
(西洋哲学と日本思想との対話)

12月13日・14日に同志社大学で行われた Colloque philosophique franco-japonais
日仏共同の哲学シンポジウムに参加してきた。翻訳提出書、通訳あり、だから語学にた
けていなくてもある程度の把握は可能である。フランス側からはディディエ・フランクを
はじめ6人の発表者、日本側からは木岡伸夫以下4人の発表者が発表を行った。

その内容は

木岡伸夫（関西大学）「無のアナロジー——山内得立の到達点」

上原真有子（京都大学）「田辺元における象徴と翻訳——ポール・ヴァレリーの
の読みを通じて」

河野哲也（立教大学）「未来と、海と空気のアフォーダンス」

田口 茂（北海道大学）「媒介としての明証性——フッサール現象学と
田辺哲学を手引きとして」

の4つであったが、私はその内、木岡、上原、田口の発表を聞いた。

田辺の象徴詩理解自体は「散文（有）⇒象徴（無）」と捉える言語論抜きの勝手な解釈で、
あまり取り上げるほどの値打ちはないだろう。田口の「媒介」（田辺）概念で明証性の確か
さをよりいっそうくきやかにしようとする試みは、なにも「媒介」によってでなくても、「地
平」の変幻に見えてくる様態把握で充分だろう。

ディディエ・フランク（パリ西大学）の発表は6日、立命館大学での発表“Présence et
Non-présence”に引き続くもので題は“Présence dans l’absence”（不在における現前）。
「提題書」によると以下のように書かれている。

Quelle peut être cette autre dimension, comment y accéder philosophiquement, c'est-à-dire depuis la métaphysique elle-même ? Posant la question de la vérité de l'être, Heidegger a tenté du même coup, notamment dans *L'entretien sur la langue* dont l'un des interlocuteurs est japonais, d'ouvrir cette dimension en remontant à ce qu'il nomme « l'unique source » dont proviennent les langues occidentales et extrême-orientales. Que faut-il alors en conclure sinon que tout dialogue philosophique entre ces traditions ne saurait aller sans une explication de la métaphysique avec elle-même et, à l'inverse que ce dialogue qu'un destin désormais commun nous impose est, à la fin de la métaphysique, une des tâches de la pensée.

この別の次元とは何か。いかにして、哲学的に、すなわち形而上学から出発して、そこ
に接近するのだろうか。ハイデガーは存在の真理についての問いを提出しながら、同時に、

とりわけその対話者が日本人である『言葉についての対話』において、この次元を開示しようと試み、彼が「唯一の源泉」と名づけるものへと遡及している。この源泉から、西洋的言語と極東的言語が派生してくるのである。

では、これら伝統間の哲学的対話は、形而上学による自己自身との対決なしにはありえないということ、また反対に、今後共有することとなる或る運命によってわれわれに課されるこの対話は、形而上学の終焉にあつて、思惟の課題のひとつであるということ以外、そこから何を結論すべきだということのだろうか。

〔訳 服部敬弘〕

ディディエ・フランクは

- ①伝統間の哲学的対話は、形而上学による自己自身との対決なしにはありえない
- ②また反対に、今後共有することとなる或る運命によってわれわれに課されるこの対話は、形而上学の終焉にあつて、思惟の課題のひとつである

というように形而上学における伝統の「自己自身との対決」と、今後共有することとなる或る運命によって「われわれに課されるこの対話」の二つを呼びかけている。

日本思想の悲観的展望？

木岡伸夫（関西大学）は、「無のアナロジー——山内得立の到達点」という発表の中で、今では殆ど忘れられかけている研究者、西田幾多郎の後継者であった山内得立をとりあげる。

日本の西欧哲学に対する態度として木岡は次の3つのタイプを挙げた。

- 1) philosophy の紹介および模倣：西周など初期の啓蒙主義に代表される。
- 2) 過去の精神的伝統の自覚：「脱亜入欧」の反動、日本主義・復古主義。
- 3) 上の2段階を統合した「哲学」の確立：philosophy に対峙する「哲学」の構築。

このうち山内は1)、2)の径路を辿りながら3)の東西論理思想の総合を試み、その東洋思想の核心に「レンマ」lemme を置いたとする。

- I A（肯定）
- II 非A（否定）
- III Aでも非Aでもない（両非）
- IV Aでも非Aでもある（両是）

「レンマ」とは「律」とか「句」という意味であり、上記4つをテトラレンマ *tetralemme* と言いインドの六師外道の一人サンジャヤ・ベーラッティプなどが四句分別としてこれを唱えた。原始仏典ではこれに批判的であるが、龍樹などは好意的だった。

Ⅲ（両非）からⅣ（両是）に行くところで「即」の論理が成り立つ。（気即意、空即是色、など）ギリシャのロゴスはこのⅢ、Ⅳを省略しⅠ、Ⅱのディレンマ **dilemme** を主体に構築されたものである。

ロゴスの論理は形式的二元論になるか、二元の対立総合の矛盾論になるかのいずれかであって、「あいだ」を認めない。それに対してレンマ的論理は「あいだ」を認める「中の論理」であって、A でも非 A でもないが故に A でも非 A でもあるという総合の「即の論理」を成立させる。これは総合の第一段階である。

この考え方を更に発展させると、西洋の「存在のアナログア」（被造物は神[存在]のアナログアである）という考え方は東洋にあっては存在の根拠としての「無」（絶対無）によって言い換えられたアナログアにならざるをえない。このことを木岡は「無のアナログア」（被造物は無[非]のアナログアである——存在の根拠は神ではなく無である）と呼んでみた。これが総合の第2段階（「即非の論理」）である。

（以上、詳しくは木岡の近刊「＜あいだ＞を開く——レンマの地平」を読んでほしいとのことである。）

ディスカッションの中では既に田辺による「無」を主語化（実体化）することへの危惧・批判があったという件が提出されたが、「無の実体化ではなく、無の経験に則って思考・実践すること、三木の考えていたような無を媒介とした形の論理」ということが答えられた。

なるほどテトラレンマはディレンマを包摂するかもしれないが、有神論に妥協がないのに対して無の論理は有神論も無神論も差別なくそのあいだをとりもつと、簡単に言い切っているのか。確かに無はすべてを包摂する。無はしかも無の器として無限の受容性をもっている。この受容性がよく有の攻撃性に耐えうるか？水の如くに・・・水の如くに・・・

死の島ーラフマニノフ、そしてベックリーン

交響詩「死の島」は1907年にラフマニノフがパリで見た1枚の絵から着想された。

それは白黒の版画だった。[図A]

左右の巨岩に囲まれて糸杉の高くそびえている島の中央部に向かって一艘の舟が静かに向かって行っている。舟には艀を漕ぐ人と背を向けた白装束の婦人が棺を前にして立っ

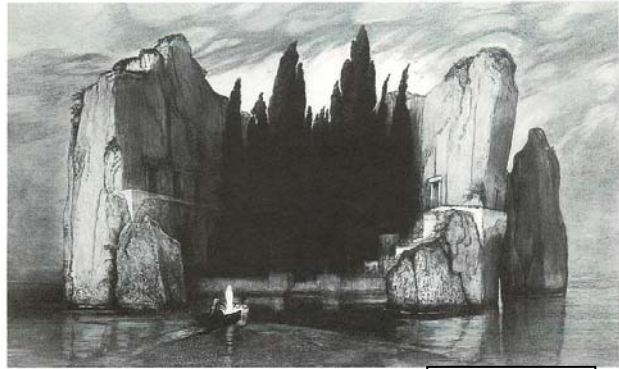


図 A

ている。これはM・クリンガーの版画によるものだが、実はこの白黒版には原画があつてそれが[図B]だ。当然カラーで全体は明るく沈痛感よりは清澄感の方が勝っている。

巨岩は水面に影を落とし、糸杉は風になびいている。(糸杉は西洋では死、哀悼の象徴)左右に白い建物が見える。側壁の入り口は納骨堂だろうか。これはA・ベックリーンによる「死の島」第3版(1883年。ベルリン国立美術館蔵)だ。ベックリーンは「死の島」を生涯に5枚描いたが、第3版はヒットラーが愛蔵して有名なヴァージョン。M・クリン



図 B

ガーもこの第3版を下絵にした。

「死の島」が作曲されて数年後に第1次世界大戦が勃発した時、戦場の兵士と家族の間で交わされたのがこの白黒版のM・クリンガーの版画「死の島」を載せた絵葉書だったという。フロイト、レーニン、ヘッセなどもベックリ

ーンの絵を居室に掛けていた。そういう意味ではこの絵はドイツの家庭では誰もが知っているポピュラーな絵だった。

もともとフィレンツェのある未亡人から夫の喪に服するための依頼を受けて描かれたものだが、その依頼にふさわしく、この絵に見入っていると哀しみというよりは安らぎを強く感じさせられる。ドイツの家庭にひろく掲げられたのもそのゆえであつたろう。

さて、ラフマニノフの交響詩「死の島」。この曲は彼の円熟期に書かれたものだが、ピアノ協奏曲などと較べてみると、あまり人気が高い作品ではない。題材の沈痛さによるものであろうか。

舟の艀を漕ぐような前奏と後奏に挟まれて人生の喜怒哀楽、そして死の到来と突然の破局が描かれている。決して甘やかな曲ではないが、死のカタストロフに至る生の部分では甘美な部分もあり、よく聞いてみると死後にもその甘美な旋律はふと顔をのぞかせたりする。生と死とが対照的に描かれており、物語的な趣もあって、ラフマニノフのコレクターにとっては逸することのできない一曲ではないだろうか。

2014. 2. 11

[付記]先日のS研究会の案内状のイラスト部分がM・クリンガーの「死の島」を背景としており、後の懇親会でこの「死の島」が話題になった時にうろおぼえの応答をして、後で赤面するという失態を犯してしまったので、一文をしたためた次第です。